

長岡市埋蔵文化財調査報告書

川  
東  
遺  
跡

# 川 東 遺 跡

— 二級河川郷本川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2  
0  
1  
2

2012

新潟県長岡市教育委員会

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

# 川東遺跡

— 二級河川郷本川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2012

新潟県長岡市教育委員会

## 例　言

1. 本書は、新潟県長岡市島崎字川東地内に位置する川東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、二級河川郷本川広域河川改修事業に伴うものであり、長岡市教育委員会が実施した。
3. 遺跡確認調査に要した費用は文化財保護部局である長岡市教育委員会が負担し、国庫および県費の補助交付金を受けた。本発掘調査に要した費用は原因者である新潟県が負担した。
4. 遺物の注記は、10+遺跡略号（KH）の後、出土位置、取り上げ番号等を記した。
5. 出土した遺物と調査に関わる資料は、すべて長岡市教育委員会で保管している。
6. 調査の体制は以下のとおりである。

### 平成 22 年度 本発掘調査

調査主体　　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
調査員　　川田 秀治（株式会社 イビソク）  
調査補助員　多田 和幸 石橋 夏樹 石光 芳康 一村 寿樹（株式会社 イビソク）  
現場代理人　高橋 育雄 木村 満（株式会社 イビソク）

### 平成 23 年度 整理作業

調査主体　　長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）  
事務局　　長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）  
調査担当　　長岡市教育委員会科学博物館 学芸員 山賀 和也  
調査員　　中山 優子（株式会社 太陽測地社）

7. 本書の執筆・編集はすべて調査担当が行った。ただし、「第V章 自然科学分析」については以下のとおりである。

第V章 1 森 将志（株式会社パレオ・ラボ）  
2 藤根 久（株式会社パレオ・ラボ）  
3 株式会社 吉田生物研究所

8. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の方々より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。（五十音順・敬称略）

浅井 勝利 前嶋 敏 株式会社中元組 新潟県長岡地域振興局与板維持管理事務所

# 目 次

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境	2
1 遺跡の位置	
2 周辺の遺跡	
第Ⅲ章 試掘確認調査	4
第Ⅳ章 本発掘調査	6
1 調査区の設定	
2 調査の経過	
3 基本層序	
4 遺構の説明	
5 遺物の説明	
第Ⅴ章 自然科学分析	12
1 川東遺跡の花粉化石	
2 川東遺跡基本土層堆積物中の珪藻化石	
3 長岡市川東遺跡出土木製品の樹種調査結果	
第VI章 まとめ	22
参考文献	

## 挿図・表目次

第1図 遺跡位置図	1	第2図 周辺の遺跡	3
第3図 試掘確認調査出土遺物	4	第4図 トレンチ配置図・土層柱状図	5
第5図 門新遺跡出土「泉田」墨書き器	23	第1表 遺物観察表	24

## 図版目次

図版1 調査区配置図	図版2 西区全体平面図	図版3 西区個別遺構図1
図版4 西区個別遺構図2	図版5 西区個別遺構図3	図版6 西区個別遺構図4
図版7 西区個別遺構図5	図版8 南区全体平面図	図版9 南区個別遺構図
図版10 北区全体平面図	図版11 北区個別遺構図	図版12 出土遺物1
図版13 出土遺物2	図版14 出土遺物3	図版15 出土遺物4
図版16 出土遺物5	図版17 出土遺物6	図版18 出土遺物7
図版19 出土遺物8	図版20 調査写真1	図版21 調査写真2
図版22 調査写真3	図版23 調査写真4	図版24 調査写真5
図版25 遺物写真1	図版26 遺物写真2	図版27 遺物写真3
図版28 遺物写真4	図版29 遺物写真5	

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

郷本川は、島崎地区の中心部を蛇行して流れているため、幾多の浸水被害をもたらしてきた。これに対し、新潟県は抜本的な解決策として島崎地区を迂回する捷水路を建設する事業を計画し、新河道を掘削することとなった。この郷本川河川改修事業は、川東遺跡に近接したところで計画されていたため、長岡市教育委員会（以下、市教委）は、事業者である新潟県長岡地域振興局地域整備部与板維持管理事務所と遺跡の取扱いについて協議を行った。その結果、事業計画地内に遺跡が広がる可能性があるため、遺跡の有無を確認することを目的とした試掘調査を行うこととなった。市教委は、平成20年12月に試掘調査を行った。調査の結果、範囲が事業計画地まで及ぶことが判明した。これを踏まえて、市教委は事業者と協議を行い、遺物・遺構が検出された部分の220m<sup>2</sup>について、記録保存を目的とした本発掘調査を行うことで合意した。本発掘調査の時期は、事業の進捗状況に合わせて平成22年度に行うこととし、報告書刊行に向けた整理作業は平成23年度に行うこととした。

平成22年に川東遺跡の北部で、すでに工事で掘削された河道の断面に遺構・遺物が確認された。そのため、遺跡が北部に広がる可能性が考えられたため、まだ掘削されずに残っている部分について試掘調査を行うこととした。市教委は、平成22年6月に第2次試掘調査を実施し、その結果平安時代の遺構・遺物が比較的良好な状態で発見され、川東遺跡の範囲が広がることが判明した。この結果を踏まえて事業者と協議した結果、遺物・遺構が検出された部分については、本発掘調査を行うこととした。調査時期は、工事時期が迫っていたため、当初予定していた本発掘調査と合わせて調査を行うことで合意した。

付替え道路部分については、事業用地が未買収であったため、用地買収の完了を待って試掘調査を行うこととした。市教委は、平成22年7月に第3次試掘調査を行った。調査の結果、古墳時代と平安時代の遺物・遺構が検出され、川東遺跡の範囲内であることが確認され本発掘調査が必要と判断した。この結果を踏まえ、事業者との協議の結果、記録保存のための本発掘調査を行うことで合意した。調査の時期は、工事着手時期が平成23年度であることから、平成22年度中にを行うこととした。



第1図 遺跡位置図

## 第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

### 1 遺跡の位置

長岡市は、新潟県のほぼ中央部に位置しており、市町村合併により西は日本海から東は守門岳までの広大な範囲が市域となっている。川東遺跡が位置する和島地域は、市域の北西部に位置している。本地域の地形は、大きく分けて東側丘陵と西側丘陵およびそれにはさまれた中央部の平坦な沖積地の3つに分けることができる。西側丘陵は、弥彦山、角田山へと続く標高100m前後のなだらかな低い丘陵である。東側丘陵は、信濃川左岸に位置し上越地方から続く発達した丘陵で、南南東から北北東に延びている。中央部の沖積地は、旧島崎川の氾濫により形成された地形である。沖積地は、和島と寺泊の境付近で標高約11.5m、島崎付近で標高約15m、出雲崎町との境付近で標高約20mとなり、南から北に緩やかに低くなっているが、ほぼ平坦な地形である。川東遺跡は、この沖積地に位置しており、標高は約14mである。

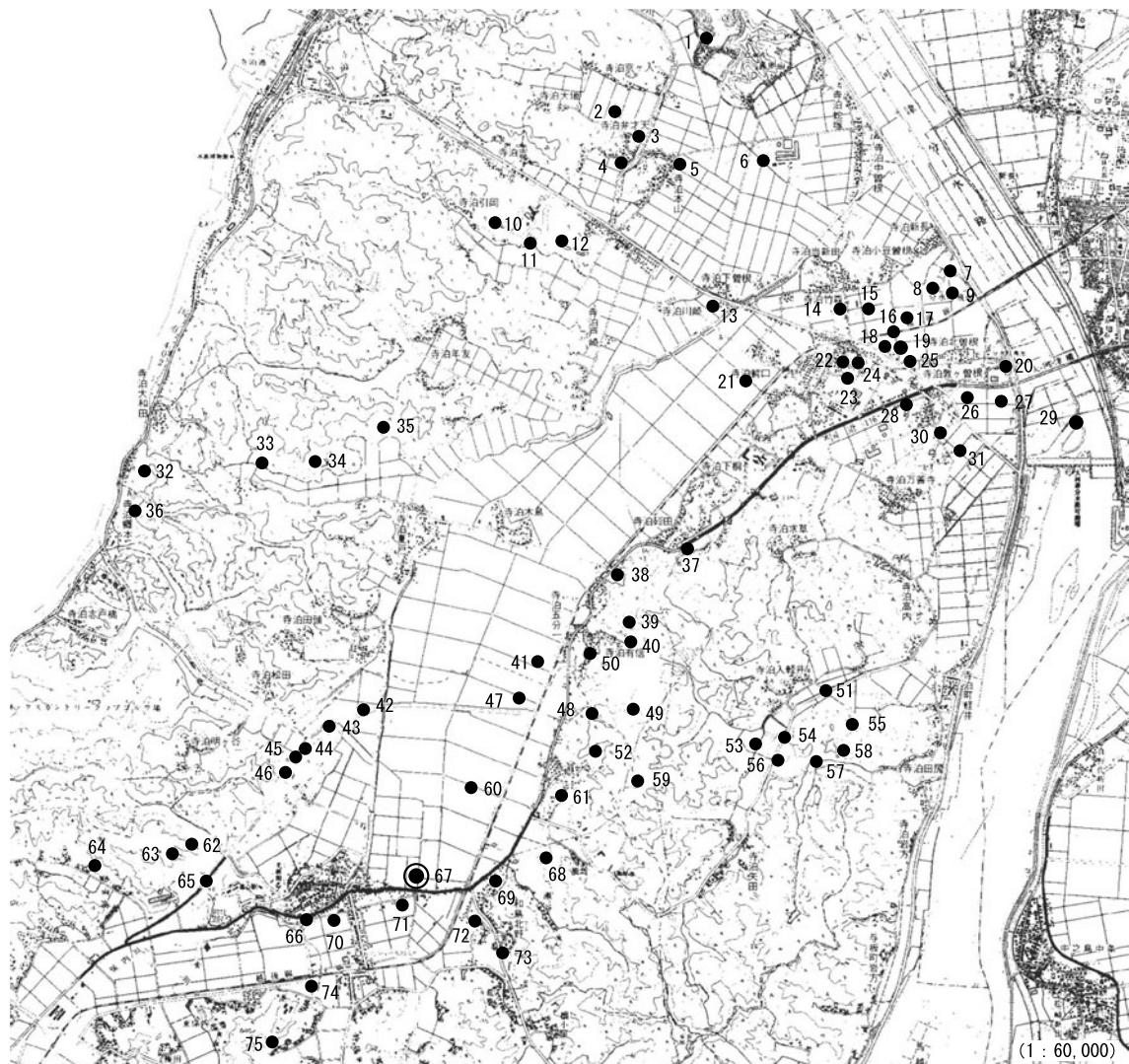
### 2 周辺の遺跡

川東遺跡の位置する旧島崎川流域では、弥生時代の遺跡は中期以降の遺跡が確認されている。本山舞台島遺跡では、前期後半と見られる土器片が検出されているが、詳細は不明である。中期の遺跡としては、諏訪田遺跡、五千石遺跡、松ノ脇遺跡などがある。主に、丘陵裾部や沖積地の微高地に位置している。諏訪田遺跡は、緑色凝灰岩・翡翠を使って勾玉・管玉を作成する玉作遺跡である。五千石遺跡は、周溝を持つ建物が検出され、中期後半に位置づけられる土器や玉作関連遺物が出土している。松ノ脇遺跡は、北陸系・中部高地系・東北系と折衷形態の土器が出土しており、中期後半の基準資料となっている。

弥生時代後期になると、遺跡数が増加しそれまでの低地の遺跡に加えて丘陵尾根上に高地性集落が出現する。東側丘陵では、赤坂遺跡群が特に注目される。赤坂遺跡群は、尾根上に約1kmに渡り展開しており、尾根を切る濠と考えられる断面「V」字形で幅約7m、深さ約6mの濠を持つ大規模な遺跡である。また、後期後半の土器や玉作関連遺物が採集されている。西側丘陵では、姥ヶ入南遺跡、奈良崎遺跡がある。

古墳時代前期に入ると、弥生時代後期に見られた高地性集落は終焉をむかえ、丘陵裾部や沖積地の自然堤防上に立地する遺跡が増加する。五千石遺跡では、この時期の玉作工房と見られる堅穴住居跡が検出され、そこから緑色凝灰岩製の管玉の製作工程が復元できる資料が出土した。また、床面には鍛冶炉跡が検出され、鍛冶関連遺物が出土しており、玉作との関連が想定されるところである。この時期の古墳は、西側丘陵上の奈良崎遺跡で2基発見されており、1号墳からは捩文鏡が出土している。東側丘陵では、下小島谷古墳群と大久保古墳群が位置している。前者は、前方後方墳2基・方墳1基、後者は前方後方墳2基・方墳1基などが確認されている。

古代において当地域は、古志郡の範囲内と考えられており、下ノ西遺跡出土の「越後國高志郡」と書かれた木簡や八幡林遺跡出土の「古志」墨書き器の存在はその傍証となろう。この地域は、県内最古の寺院跡である横滝山廃寺、7世紀中葉から10世紀前半まで存続し、官衙や有力者層の居宅と考えられる下ノ西遺跡、「沼垂城」木簡や「郡司符」木簡など新潟県の古代史では欠かせない遺物が出土した八幡林遺跡、10世紀前半の開発領主の居宅と考えられる門新遺跡が存在し、古志郡の中核部であった。その他の集落遺跡は、これまで遺跡が見られなかった海辺や西側丘陵の寺泊地域にも遺跡が見られるようになり、丘陵裾部や沖積地の自然堤防上を中心に遺跡数が増加する。



No.	名称	時代	No.	名称	時代	No.	名称	時代
1	京ヶ入	古代	26	太屋敷	古代	51	谷地	古代
2	稻場	平安	27	北曾根	古代	52	上桐城	弥生
3	弁天	平安	28	大溜	古代	53	杉の入	古代
4	箕輪	古代	29	五千石	古墳	54	五千石溜	古代
5	本山舞台島	弥生	30	山屋敷	平安	55	五兵の畠	古代
6	当新田山下	平安	31	敦ヶ曾根狐塚	古代	56	屋敷塚1号墳	弥生
7	地蔵の木	古代	32	七ツ石	平安	57	五畠作北	平安
8	居屋敷	古代	33	吉竹西	古代	58	大久保古墳群	古墳
9	草薙	弥生・古墳・古代	34	三反田南	古代	59	赤坂	弥生
10	金八	平安	35	夏戸窯跡	平安	60	上新田	古墳
11	長八	平安	36	今町	平安	61	上桐神社裏	弥生・古墳
12	新田	平安	37	土手上	古墳	62	山田郷内	弥生・古墳・古代
13	小潟	古代	38	小谷地割	古代	63	吉沢	古代
14	竹森上向	古代	39	柳橋	古代	64	坂谷	弥生
15	中向	古代	40	よふヶ入	古代	65	八幡林	古代
16	かんろくら	古代	41	割田	平安	66	浦反甫西	平安
17	おくら	古代	42	大武	弥生・古墳・古代	67	川東	弥生・古墳・平安
18	鳥原田	古代	43	奈良崎	弥生・古墳・古代	68	松ノ脇	弥生・古墳
19	諏訪田	弥生・平安	44	姥ヶ入製鉄	平安	69	北野大平	弥生・古代
20	野起	弥生・古墳	45	姥ヶ入南	弥生・古墳・古代	70	浦反甫	平安
21	古屋敷	弥生・古墳	46	妙満寺跡	古代	71	浦反甫東	平安
22	横滝山舞台塚	古墳	47	門新	古墳・平安	72	北野丸山	古墳・古代
23	横滝山	弥生・古墳・平安	48	ヤケ山	弥生	73	北野城	弥生
24	庚塚	古墳	49	イヅヶ入	弥生	74	下ノ西	古代
25	京田寄割	古代	50	五分一稻場	古墳・平安	75	下小島谷古墳群	古墳

第2図 周辺の遺跡（弥生時代以降）

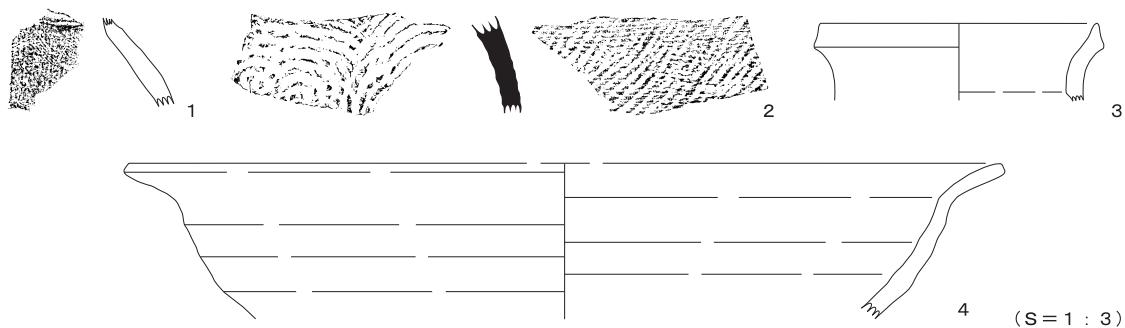
### 第Ⅲ章 試掘確認調査

長岡市教育委員会は、郷本川河川改修事業に伴う試掘調査を平成20年度から行っている。そのうち川東遺跡に関わる部分の試掘調査は合計3回行われた。本発掘調査で北区と南区にあたる部分の試掘調査については、すでに報告（平成20・22年度）されているため概略を記載する。合わせて未報告となっていた西区に当たる部分の確認調査について報告する。第4図のトレンチ番号は、煩雑になるのを避けるため、調査時のトレンチ番号ではなく、便宜的に通し番号を振った。

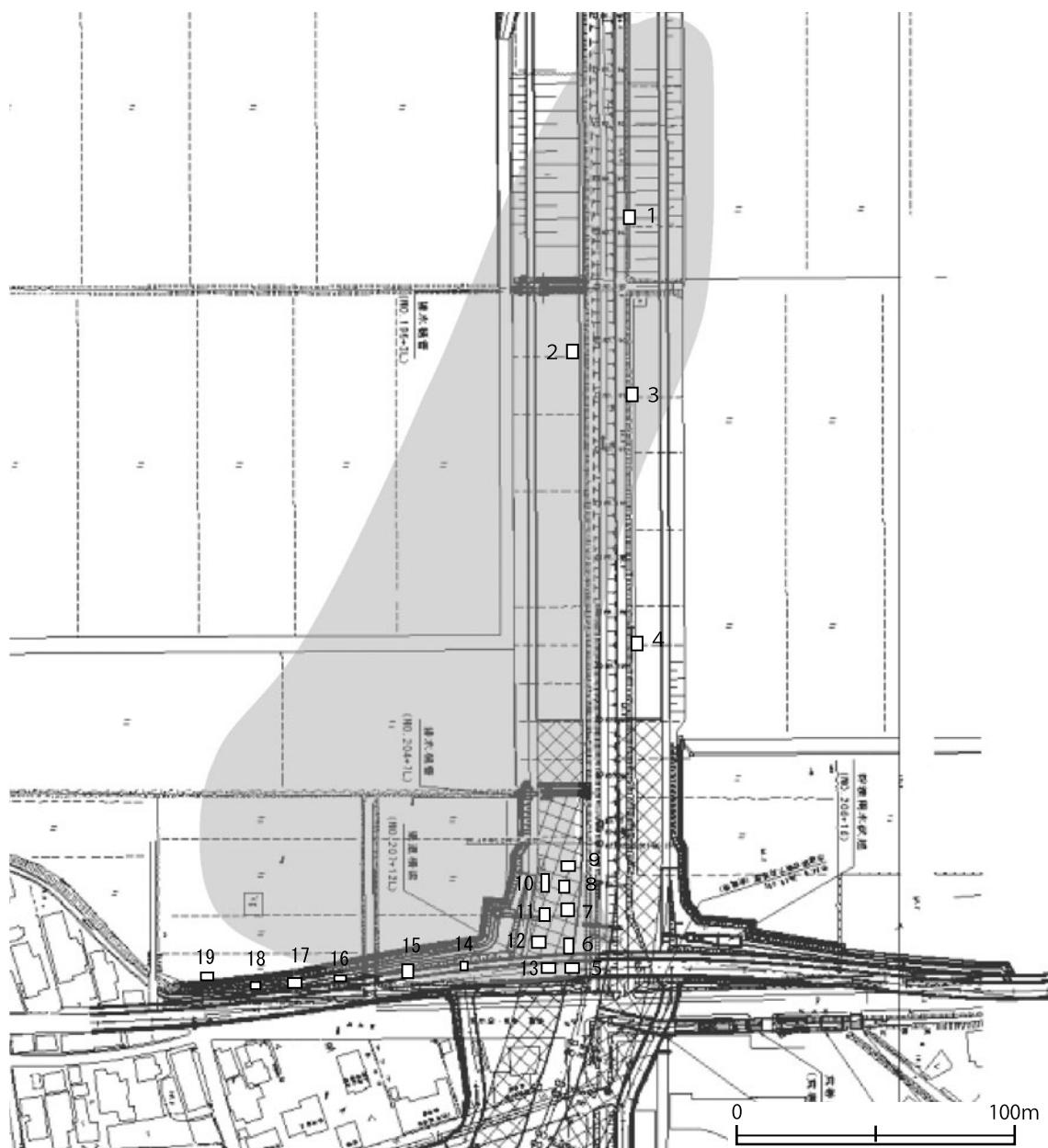
第1次試掘調査（トレンチ番号5～13）は、事業計画地が川東遺跡に近接することから、遺跡の有無を確認することを目的として実施された。調査は、平成20年12月18・19日に行われた。任意のトレンチを9ヵ所設定し、そのうち4ヵ所から古墳時代を中心とする遺物・遺構が検出された。これらから事業計画地は川東遺跡の縁辺部に位置するものと考えられた。

第2次試掘調査（トレンチ番号1～4）は、川東遺跡の北部で行われた。この部分は、川東遺跡の範囲外であったが、すでに河道が掘削された断面に遺構・遺物が確認されたことから、遺跡の広がりを確認するため残存部について調査を行った。トレンチは4ヵ所設定し、そのうちの1ヵ所から平安時代の遺構・遺物が発見された。遺構は、柱穴などであり、集落跡の可能性が想定された。これらは比較的良好な状態で発見され、川東遺跡の範囲が広がることが判明した。そのため、北区として本発掘調査を行った。

第3次試掘調査（トレンチ番号14～19）は付替え道路部分について調査を行った。この部分は、用地買収の完了を待って、平成22年7月7日に試掘調査を行った。調査対象は、道路用地のうち川東遺跡範囲にかかる約1,300m<sup>2</sup>である。調査は、2×3m程度のトレンチを任意に6ヶ所設定し、掘削を行った。周辺の調査では深さ約50cmで遺構・遺物が出土していたことから、その深度を目安として調査を開始した。その結果、いずれのトレンチも、深度約50cm付近で青灰色粘土層が確認された。16Tで小ピットが1基検出された。遺物は、暗灰色粘土～褐色粘土層から古墳時代前期と平安時代の土器が出土した。18Tでは深さ約90cmの大きな落ち込みが確認され、古墳時代の土師器が出土した。遺物は、すべてのトレンチから出土しており、15・18Tでは他のトレンチよりも比較的多く出土した。全体的に状態が不良で小片が多数をしめる。第3図に図示した遺物は、第3次調査で出土した遺物である。1は15Tで出土した古墳時代前期の壺の肩部資料である。波状の櫛描文が施されている。2は、17Tで出土した平安時代の須恵器の甕である。調整は、外面が格子目タタキ後カキ目、内面は同心円文の当て具を当てている。3・4は、18Tで出土した。3は、古墳時代前期の壺の口縁部である。口径は、5.8cmである。4は、平安時代の鍋である。口縁部は外側に大きく屈曲し、口縁端部は面取りされている。



第3図 試掘確認調査出土遺物



18 T	17 T	16 T	15 T	14 T	12 T	5 T	3 T
1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	4	4	9
4	3	4	5	6	3	10	4
8	7	3	6	8	8	3	8
	8	8	8				

第4図 トレンチ配置図・土層柱状図 (1 : 20)

# 第IV章 本発掘調査

## 1 調査区の設定

調査区のグリッドは、当初南区に設定し、世界測地系 X = 175430・Y = 24490 を基準に 1 辺 10m のグリッドを組み、大グリッドとした。その後、西区の調査が必要になり、南区でのグリッドを西区まで延長し、グリッド番号は北西角を基点として東西に 1、2、3・・・・、南北に A、B、C をつけた。また、大グリッドの中を 1 辺 2 m の小グリッドを組み、25 区画に分割し、北西角を 1 として西から東に番号を振った。

北区については、調査区が離れていることと調査範囲が狭いことから、グリッドは組まなかった。

## 2 調査の経過

平成 22 年 6 月 15 日作業小屋、機材、重機を搬入し調査を開始した。調査は、北区から開始した。北区は、確認調査で包含層掘削まで終了していたため、遺構検出作業を行った。18 日掘立柱建物跡を検証し、2 棟の掘立柱建物跡を確認した。24 日北区の遺構調査を終了し、完掘写真の撮影を行った。南区では平行して表土剥ぎを行い、その後包含層掘削を行った。遺物は、平安時代の遺物を含むものの主体は古墳時代の遺物であった。29 日南区では、遺構検出作業を行った。北区では周辺で古墳時代の遺物が採集されていたため、下層の確認のため掘削を行ったが下層がないことを確認した。また、北区では柱穴の有無を確認するため、調査区を西側に拡張した。30 日北区で小ピットから墨書土器が発見され、後日洗浄し墨書を確認したところ「泉田西庄」と書かれていることを確認した。新たに、発見された遺構を記録し、北区の調査を終了した。7 月 1 日南区の遺構検出作業を終了した。2 日から遺構調査を行い、9 日に遺構調査を終了し、空中写真撮影を行った。その後機材を撤去し、一次調査を終了した。

二次調査は、西区の調査を行った。12 月 1 日に重機による表土剥ぎを開始した。6 日表土剥ぎを終了し、包含層掘削を開始した。主に古墳時代の遺物を出土するが、平安時代の遺物も含まれている。13 日から遺構検出作業を開始した。溝状遺構、土坑等を確認した。年末年始の中止期間をはさみ、平成 23 年 1 月 5 日から調査を再開し、遺構調査に着手した。深度が深くなる遺構は、安全面を考慮し、空中写真撮影後深度の確認トレンチを入れることとした。28 日西区の遺構調査を終了し、空中写真撮影を行った。その後、補足調査を行った。2 月 2 日機材等の撤収作業を行い、調査を終了した。

## 3 基本層序

調査地の現況は、水田である。西・南区と北区とで、堆積状況が異なるため、両者を分けて記述する。西・南区は大きく分けて 7 層に分類することができる。VI 層が暗灰色粘土層で、遺物包含層である。西区ではしっかり確認できる程度の厚さであったが、東に向かって徐々に薄くなり、南区では青灰色粘土が多く混ざり、VII 層との境目がやや不明瞭になってくる。VII 層は、青灰色粘土層で遺構確認面である。標高は 13.5m～13.7m であり、概ね平坦な地形である。

北区は、4 層に分類できる。III 層が暗灰色粘土層で遺物包含層である。IV 層が灰色粘土層で、遺構確認面である。北区付近で、古墳時代前期の土器片が採集されたことから、IV 層の調査後追加の深掘りを行ったが、遺物・遺構は確認されず、下面はないものと判断した。

## 4 遺構の説明

### 西区

**S R 1** A 6・B 6 グリッドに位置し、北-南方向に延びる。南壁では2条であるが調査区内で合流し北壁では1条になっている。深さはごく浅く0.15mで、覆土は黒褐色粘土を主体としている。出土遺物は、古墳時代の土師器の高坏(1)、甕(2)、平安時代の須恵器坏(3)、甕(4)が出土している。その他土師器片が出土しているが、摩滅が激しく微細であるため、時期は不明である。

**S R 2** A 5・B 5 グリッドに位置して、南西-北東方向に延びる。確認された規模は、幅5.13m、深さ0.28mを測る。覆土は2層に分けられ、水平に堆積している。出土遺物は、1層から須恵器の瓶類、土師器片が出土している。2層からは、土師器が多量に出土している。そのうち21点を図示した(5~25)。全て古墳時代前期に属するものであり、S R 2は古墳時代前期に属するものと考えられる。

**S R 3** A 4・5、B 4・5 グリッドにまたがるところに位置している。長軸は南西-北東方向に延びる。遺構の上部西側がS R 4に切られている。規模は、幅が8.32mである。深さは約1.5mのところまで確認したが、それよりも深くなるため空中写真撮影の終了後、底面及び覆土の堆積状況を確認した。その結果、深さは、1.46mであった。覆土はレンズ状に堆積し、最下層は灰色粘土層で腐植土が混入していた。出土遺物は、古墳時代前期の土師器(26・27)と平安時代の須恵器(28~30)が出土している。

**S R 4** A 4・B 4 グリッドに位置している。長軸は、南西-北東方向である。確認された幅は6.72mである。S R 3と同じく空中写真撮影の終了後確認トレンチを設定し、底面を確認した。深さは、1.36mである。S R 4はS R 3・S R 5を切っており最も新しい遺構である。出土遺物は、平安時代の須恵器坏(31)、甕類と土師器の碗が出土している。

**S R 5** A 3・B 3 グリッドに位置している。長軸は、南西-北東方向である。確認された幅は8.69mであるが、遺構の東部分はS R 4に切られている。覆土は、確認された上位は水平堆積している。S R 5も空中写真撮影の終了後確認トレンチを設定し、底面を確認した。深さは、1.56mである。出土遺物は、須恵器の坏類、甕類と土師器が出土している。遺物の主体は平安時代の遺物である。そのうち平安時代に属する9点(32~40)を図示した。古墳時代に属すると思われる遺物は、微細なため図化できなかった。

**S R 6** B 2 グリッドに位置している。長軸は、南西-北東方向である。遺構は調査区の西端に位置しており、遺構は調査区外に広がっており、全体形はつかめない。深さは0.33mを測り、覆土は暗灰色粘土の単層である。出土遺物は、須恵器の甕、土師器の甕類、器台、高坏、蓋などが出土している(41~44)。出土遺物の中には赤彩された高坏と蓋の破片も含まれるが、微細なため図化できなかった。

**S D 2** A 12-8 グリッドに位置する。主軸は、南東-北西方向に走る。確認された規模は、長さ7.7m、幅0.34m、深さ0.05mである。出土遺物はなく、所属時期は不明である。

**S K 1** A 12-18 グリッドに位置する。平面形は、不整形で長径1.98m、短径0.85m、深さ0.08mである。出土遺物は、土師器が少量出土している。

**S K 2** B 12-2 グリッドに位置する。平面形は、不整な楕円形で長径1.98m、短径0.93m、深さ0.09mである。出土遺物は、土師器が1点出土している。

**S K 3** B 12-1 グリッドに位置する。平面形は不整形で長径1.92m、短径1.54m、深さ0.11mである。出土遺物は、古墳時代前期に属する甕(45・46)などが出土している。

**S K 4** B 11-14 グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で長径1.10m、短径0.21m、深さ0.04mである。出土遺物は、古墳時代前期に属する。器台(47)が出土している。

**S K 5** A 11-6 グリッドに位置する。遺構は、調査区外にも広がっており、全体形は確認できない。確認された規模は、長さ 1.43m、幅 0.30m、深さ 0.07m である。覆土は、暗灰色粘土層と黄灰色粘土層の 2 層に分けられる。出土遺物は、古墳時代前期の器台（48）と小型の壺（49）が出土した。

**S K 6** A 9-16・17 グリッドに位置する。遺構の南側は開渠によって削られているが、平面形は、円形になるものと推定される。遺構の規模は、長径 0.56m、短径 0.53m、深さ 0.06m である。覆土は、暗灰色粘土であるが、遺構底面付近に多量の炭化物を含む。出土遺物は、赤彩された高坏（50）が出土している。

**S K 7** B 8-4 グリッドに位置する。遺構の南側は攪乱によって削られている。確認された規模は、長径 1.30m、短径 0.61m、深さ 0.10m である。出土遺物はない。

**S K 8** B 8-8・9 グリッドに位置する。平面形は、不整形で長径 1.76m、短径 1.69m、深さ 0.66m である。底面の形状は、一様ではない。覆土は、灰色粘土～暗灰色粘土を主体とし炭化物を含み、下位では水平に上部ではレンズ状に堆積している。出土遺物は、古墳時代前期に属する蓋（51）・高坏（52）・器台（53）が出土している。その他の遺物は、土師器片が出土している。

**S K 10** A 7-21・22 グリッドに位置している。遺構の西側は調査区外に延びているため、全体形を知ることはできない。確認された規模は、長径 4.30m、短径 2.76m、深さ 0.07m を測る。出土遺物はない。

**S K 11** B 7-2・6 グリッドに位置している。遺構の南側は調査区外になっており、全体形を知ることはできない。平面形は、楕円形になると思われ、確認された規模は長径 2.85m、短径 1.20m、深さ 0.15m である。出土遺物は、古墳時代の土師器の甕類や平安時代の土師器の椀や小甕が出土している。

**S K 12** A 6-20・25 に位置している。平面形は、楕円形で長径 0.74m、短径 0.48m、深さ 0.11m を測る。断面形は、台形状を呈する。出土遺物は、土師器が少量出土している。

**S K 13** B 6-5 に位置している。平面形は、円形を呈する。規模は、長径 0.78m、短径 0.68m、深さ 0.16m を測る。断面形は、台形状を呈する。出土遺物は、土師器が少量出土している。

**S K 14** A 6-20・25 に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径 0.98m、短径 0.66m、深さ 0.08m を測る。出土遺物は、壺（54）を出土している。その他の遺物は、土師器が少量出土している。

**S K 15** B 2-5 グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外に広がっており、全体形は不明である。確認された規模は、長さ 0.96m、幅 0.93m、深さ 0.06m である。出土遺物は、土師器が少量出土している。

## 南区

**S D 1** B 14・15 グリッドで発見された。南西-北東方向に走っている。西区で発見された S D 1 はこの遺構とつながるものと考えられる。上端の幅は 2.5m ほどで、深さは 0.4m ほどである。遺構は、包含層を掘り込んでいることから、かなり新しい遺構と考えられる。出土遺物は、土師器片が多数出土したがその多くは摩滅が激しく微細なため、図化できなかった。図化した遺物は古墳時代前期に位置づけられる土師器（96～99）と平安時代の須恵器坏（100）である。

**P 1** A 14-14 グリッドで発見された。平面形は、長径 0.25m、短径 0.24m の円形を呈する。深さは、0.10m である。遺物は、微細な土師器片が出土している。

**P 2** A 14-13 グリッドで発見された。平面形は、長径 0.31m、短径 0.27m の円形を呈する。深さは、0.06m である。遺物は、微細な土師器片が出土している。

**P 3** B 14-13 グリッドで発見された。平面形は、長径 0.59m、短径 0.56m で円形を呈する。断面は箱型となり、深さは 0.50m である。P 3 は S D 1 底面から発見されており、上部は S D 1 に削られている可能性がある。出土遺物は、微細な土師器片と須恵器の坏が出土している。

## 北区

**S B 1** 建物跡は、梁行3間の主屋に1間分の庇が付く構造で、桁行は1間分を確認した。建物跡の東側は、調査区外になっており、全体を確認することはできなかった。柱間は梁行2.1mで庇の部分は1.4mである。桁行は、2.2mである。主軸方向は、N-5°-Eでほぼ南北に合っている。柱穴は長径22cm~50cmを測る円形あるいは楕円形を呈する。深さは、6cm~64cmで、ばらつきがある。掘り方の覆土は、炭化物を微量に含む灰色粘土である。柱穴のうちP10とP14では柱根が出土した。確認された柱根は、下端部を加工され尖っており、打ち込み式の柱である。遺物は、P6から須恵器甕の口縁部の資料(114)が出土しているが、年代が分かる資料は出土していない。

**S B 2** 建物跡は、桁行4間分の柱穴を確認した。柱間はほぼ2.1mであるがP18とP28の間はやや長く2.3mである。主軸方向はほぼ南北に合っている。掘り方の覆土は、炭化物を微量に含む灰色粘土である。柱穴は長径20cm~46cmを測る円形あるいは楕円形を呈する。深さは、P33を除けば38cm~62cmである。柱穴のうちP18とP25では柱根が出土した。P25の柱根は、S B 1の柱根と同じく、下端部を加工し尖らせている。P18は残存状態が悪く全体の形状を知ることができない。遺物は出土していない。

**P 7** P7の西側は、すでに河道の掘削により失われている。平面形は、楕円形になるものと推定される。遺構の規模は、残存している部分で長径1.07m、短径0.57m、深さ0.09mである。遺構の底面には、全体に炭化物が確認された。出土遺物はない。

**P 21** 平面形は、円形を呈す。規模は、長径0.36m、短径0.30m、深さ0.62cmである。遺構の内部には柱根が残存していた。柱根は、断面は長方形に近いような形状で、先端部は平に加工されている。

**P 37** 平面形は、楕円形を呈す。規模は、長径0.56m、短径0.40m、深さ0.34mである。遺構の内部には柱根が残存していた。柱根は、幅17.3cm、厚さ14.2cmを測るが、腐食がかなり進み状態はかなり悪い。

## 5 遺物の説明

### 西区

**S R 1** 土師器の高坏(1)、甕類(2)、須恵器の無台坏(3)、甕(4)である。3は、口径14.8cm、底径7.0cm、器高3.6cmを測る。器壁は厚みがあり、底部から口縁部にまっすぐ伸び、外傾している。4は、甕の胴部片で、外面は格子目タタキ後カキ目が施され、内面は同心円文状當て具が当てられている。

**S R 2** 土師器の甕(5)、器台(7・8)、高坏(9~11)、壺(12~16)、甕(6・17~25)である。5は、底部に穿孔が1ヵ所ある。6は、底部中央が窪んでいるが、貫通していない。7は、結合器台の受け部である。内外面共に赤彩が施されている。9~11は、高坏の脚部である。「ハ」字状に開き、2ヵ所(11)あるいは3ヶ所(9・10)透穴が穿たれている。11は、外面が赤彩されている。13は、有段口縁の壺で古墳時代前期前半に位置づけられる。14は、胴部球形の小形の壺と思われる。16は、壺の底部で、側面に指圧痕が残る。17~19は、口縁部が「く」の字型に屈曲し、端部は丸みを帯びている。

**S R 3** 土師器の甕(26・27)、須恵器の甕(28~30)である。26は、甕の口縁部の資料で、大きく外反し、口縁端部はわずかにつまみあげている。28~29は、甕の胴部である。調整は全て、外面には格子目タタキ後カキ目が施され、内面には同心円文状の當て具を当てている。

**S R 4** 須恵器の有台坏(31)である。底部から口縁部に向かってまっすぐ伸びる形態である。

**S R 5** 平安時代の須恵器の有台坏(32)、長頸瓶(33)、瓶類(34)、円面硯(35)、甕(36・37)、土師器の長甕(38)、椀(39)、鍋(40)である。32は、方形の高台が付く、小型の有台坏である。34は、瓶類の脚

部である。上面には胴部との接合痕が残っている。35は、円面硯の硯部で、上面は平滑になっている。38は、平底の長甕である。内外面ともにハケ調整されている。39は、底部回転糸切りで内面は磨かれている。40は、丸底になると思われる。調整は外面平行タタキ、内面平行線文当て具が当てられている。

**S R 6** 古墳時代前期の鉢（41）、壺（42・43）、甕（44）である。41は、胴部と口縁部の境目に段があり、比較的長い口縁部が付く。43は、有段口縁壺の口縁部で、外面に5条の疑凹線が施されている。内外面ともに赤彩されている。44は、甕の口縁部で口縁端部が平坦でわずかに下方につまみ出されている。

**S K 3** 古墳時代の甕（45・46）である。45は、「く」字状に屈曲する口縁である。46は、叩き甕の胴部片である。

**S K 4** 古墳時代の器台（47）である。摩滅が激しく調整は確認できない。

**S K 5** 古墳時代の器台（48）、壺（49）である。49は、ミニチュア土器の壺である。

**S K 6** 古墳時代の高坏（50）である。口縁部は屈曲し、上方にまっすぐ伸びる形態である。内外面共に、赤彩されている。古墳時代前期前半に位置づけられる。

**S K 8** 古墳時代の蓋（51）、高坏（52）、器台（53）である。51は蓋のつまみ部分で、内外面共に赤彩されている。52は、内外面ともにミガキがあり赤彩されている。53は、器台の脚部であり、外面はミガキが施されている。

**S K 14** 古墳時代前期の甕の底部（54）である。内外面ともにハケ調整されている。

**P 26** 甕（55）、蓋（56）である。55は口縁部が外反し、口縁端部は平坦に調整されている。56は蓋と考えられるが、上部が欠損しているため全体形は不明である。

**遺構外** 古墳時代の土師器（57～86）、平安時代の須恵器（87～94）、土師器（95）である。57は、蓋とも考えられるが、つまみに孔が穿たれている例がないことや形態から取っ手付の甕と考えたい。58～62は器台である。58は受部が内湾して立ち上がる。59は、脚部で外面は赤彩されている。60・62は脚部に透孔が4ヵ所穿たれている。63は、高坏の受部である。口縁部は有段で外反して端部にいたる。64は坏で、口縁部の屈曲が緩やかで体部との境目が不明瞭である。内面は黒色処理されている。古墳時代後期に属する。65は、鉢の胴部と考えられる。66～73は壺である。66・67・70～72は有段口縁であるが、内面は段が不明瞭なものが多い。68は、屈曲が弱く、口縁端部は外反する。69は、「く」字状に口縁が屈曲し、端部は平坦になる。74～85は、甕である。74は、「く」字状口縁で口縁端部はわずかに下方につまみ出されている。内外面ともにハケ調整され、一部に指圧痕が残る。80は、有段口縁で口縁端部に向かってまっすぐ伸びる形態である。86は、土錐で、片側の端部が欠損しているため長さは不明である。87・88は無台坏で底部の切離しはヘラ切りである。両者とも平底の底部から直線的に口縁部に向かって立ち上がる形態である。88は、器壁はやや厚手である。年代は9世紀前半に位置づけられるものと考えられる。小泊産ではない。89は、瓶類の底部である。方形の高台が付き、底部には指圧痕が残っている。90～94は甕の胴部破片である。全て外面に格子目タタキ後カキ目が施され、内面に同心円文当て具が当てられている。95は、鍋である。口縁部は外側に屈曲し、口縁端部は外側につまみ出されている。

## 南区

**S D 1** 96～98は古墳時代前期の甕の口縁部である。98は、有段口縁で下方にわずかにつまみ出されている。99は高坏の脚部で、透穴が穿たれている。100は須恵器の無台坏で、9世紀後半に位置づけられる。

**S D 2** 土師器の甕（101）、器台（102）、須恵器の横瓶（103）が出土している。101は、「く」字状に屈曲した口縁で、端部は平坦になっている。102は、器台の脚部で、内外面ともに磨かれている。両者とも古

墳時代前期に属する。103は、外面に平行タタキ後カキ目、内面に同心円文当て具を当てている。

**S D 3** 104は高坏の脚部である。透孔が4ヵ所に穿たれている。古墳時代前期に属する。

**遺構外** 古墳時代前期の土師器の器台(105・106)、甕(107・108)、平安時代の須恵器の無台坏(109)、瓶類(110・111)、甕(112・113)である。105・106は脚部で摩滅が激しく調整は不明である。108は、口縁部が「く」字状に屈曲し、胴部は体部の張りが弱い。109は、器壁は薄手で底部から口縁に向けてまっすぐに立ち上がる。9世紀後半に位置づけられる。110は、胴部資料、肩が張る形態である。112は、甕の口縁部で、端部は面取りされ、外側につまみ出されている。外面は、ハケ調整後ロクロナデされている。

## 北区

**P 6** 須恵器の甕(114)である。口縁部は緩やかに外反し、端部は下方につまみ出されている。

**P 36** 須恵器の無台坏(115)である。口径12.1cm、底径6.6cm、器高2.1cmを測る。器壁は薄手で、口縁部の外傾度は大きい。口縁から底部の外面に墨書で「泉田西庄」と書かれている。

**S X 6** 須恵器の蓋(116)である。蓋のつまみ部分で、ボタン状を呈している。

**遺構外** 平安時代の須恵器の蓋(117・118)、無台坏(119~122・125・126)、有台坏(123・124)、短頸壺(127・128)、瓶類(129)、甕(130~134)、土師器の椀(135・136)、小甕(137)である。117・118は、口縁端部が下方に屈曲し断面は三角形を呈する。122は、上部を打ちかかっている。123・124は、共に外端設置する高台が付き、124はやや長い。両方とも深身の有台坏になると思われる。125は、底部の切離しは回転糸切りである。口縁部にタールが付着しており、灯明皿として利用されたものと思われる。126は、底部内面に墨痕が付着しており、硯として利用された転用硯である。周囲は打ちかかれている。127は、短頸壺で口縁部は直立しており、口径12.0cmを測る。128は、短頸壺の底部で、外端設置する方形の高台が付く。129は、瓶類の底部で、内外面ともに自然釉がかかっている。131は、口縁部は緩やかに外反する。端部は下方につまみ出されて稜を持つ。132は、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部は内側につまみ出されている。胴部外面はカキ目が施され、内面は同心円文当て具が当てられている。

**その他** 138~149は、北区に近接した地点で行われた工事立会いで出土した遺物である。平安時代の遺物が出土している。138~140は有台坏で、浅身のもの(138)と深身のもの(139・140)が出土している。141は、横瓶で、外面に格子目タタキ、内面に同心円文当て具を当てている。144と149は甕の口縁部で、端部付近で外反し、端部は上方につまみ出されている。149は、小片で口径は出せなかつたが、大型の甕になると思われる。150~161は、調査区周辺で採集された遺物である。150は、高坏の口縁部と思われるが小片で口径が出せなかつた。内外面共に赤彩が施されている。156は甕で、球形の胴部には刺突文がある。160は櫛描文と刺突文が施された壺の胴部である。古墳時代前期に属すると思われる。

**古銭** 古銭は2枚出土し、景德元宝(1004年)と寛永通宝(1636年)がそれぞれ1枚出土した。

**木製品** 164~169は柱根である。樹種は全てクリである。166・168はS B 1の柱穴から出土した。先端を加工し尖らせており、杭のような形態になっている。165・167はS B 2の柱穴から出土した。165も先端を尖らせている。169は出土した柱根の中で最大のもので、幅22.6cm、厚さ16.6cm、長さ47.4cmを測り、断面は隅丸の長方形である。底部の形状が分かるもので唯一平坦に加工されている。

# 第V章 自然科学分析

## 1 川東遺跡の花粉化石

森 将志（株式会社パレオ・ラボ）

### 1.はじめに

川東遺跡は新潟県長岡市島崎地内に位置し、郷本川右岸の自然堤防上に立地している。この遺跡は北区と南区に分けて発掘が行われており、南区では弥生時代末～古墳時代前期の土器が出土している。しかし、南区では遺構・遺物ともに少なく、遺跡を評価する情報量が乏しい。そのため、少しでも遺跡の理解を深めるために当時の環境を復元する目的で基本土層から珪藻分析と花粉分析の試料が採取された。以下ではこの試料について行った花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生について推定した。

### 2.試料と分析方法

試料は川東遺跡の南区北壁セクションから採取された4試料（上位から試料No.1, No.2, No.3, No.4）である。試料No.1は灰色の砂質粘土、試料No.2は黄褐色の砂質粘土、試料No.3と試料No.4は黄褐色のやや砂質な粘土である。これらの試料から次の手順で花粉化石を抽出した。

試料（湿重量約2～3g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え一昼夜放置する。水洗後46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1の割合の混酸を加え10分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。なお、試料No.4については試料に含まれていた花粉化石が少なく、樹木花粉を200個数えられなかつたため、作製したプレパラート全面を検鏡した。ちなみに、試料から産出した花粉化石の分類群ごとの単体標本（PLC.82～87）はパレオ・ラボに保管されている。

### 3.分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は樹木花粉31、草本花粉28、形態分類を含むシダ植物胞子4の総計63である。これらの花粉・胞子の一覧表を表1に示し、花粉化石の分布図を図1に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉・胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。また、図表においてハイフン（-）で結んだ分類群はそれらの分類群間の区別が困難なものを示す。さらに、クワ科、マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に括して入れてある。

樹木花粉では落葉広葉樹の樹種を中心として産出しているが、上位に向かって増加傾向にある分類群と、減少傾向にある分類群がある。増加傾向にあるのはコナラ属コナラ亜属、カバノキ属、クリ属-シイノキ属、マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）などである。減少傾向にあるのはヤナギ属、クルミ属-サワグルミ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属などである。その他にはスギ属、クマシデ属-アサダ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属などの植物が下位から上位にかけて数%の産出率で一定して産出している。

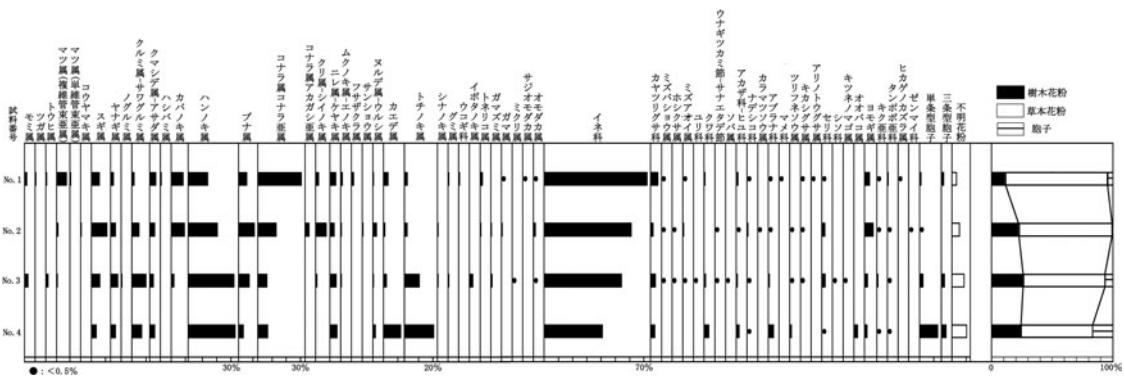


図1 川東遺跡における花粉ダイアグラム

草本花粉ではイネ科花粉が最も多く産出している。イネ科花粉は試料 No. 4 で産出率が 41%であるが、上位に向けて増加し、最上位の試料 No. 1 では 72%になる。試料 No. 4 以外の試料では抽水植物であるガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属や、好湿性のミズバショウ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属などが僅かながら産出している。ただし、ツリフネソウ属に関しては試料 No. 4 でも 1%の産出がある。さらに、栽培植物であるソバ属花粉が試料 No. 3 で僅かに産出している。また、カヤツリグサ科とヨモギ属が数%ながら一定して産出しており、ヨモギ属に関してはやや増加傾向にある。

#### 4. 考察

試料 No. 4 は他の試料に比べて総産出花粉数が少ないため、古植生について詳細に述べることは難しいが、試料 No. 4 から産出する樹木花粉から当時の植生を推察すると、クルミ属-サワグルミ属、クマシデ属-アサダ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、カエデ属、トチノキ属などの落葉広葉樹林が中心となり、そこにスギが混じる森林が丘陵地に分布していたと思われる。試料 No. 3～試料 No. 1 の堆積期間になると、こうした落葉広葉樹の中でカエデ属、クルミ属-サワグルミ属、トチノキ属などが減少傾向となる。この原因は、当時の人々がこうした樹木を伐採して木材を利用していたためではないかと思われる。さらにこの堆積期間では、樹木花粉の中でニヨウマツ類、コナラ属コナラ亜属、クリ属-シイノキ属、カバノキ属などが増加傾向にある。これらは二次林要素の植物であり、おそらく伐採跡地に侵入し分布を広げていったものと思われる。

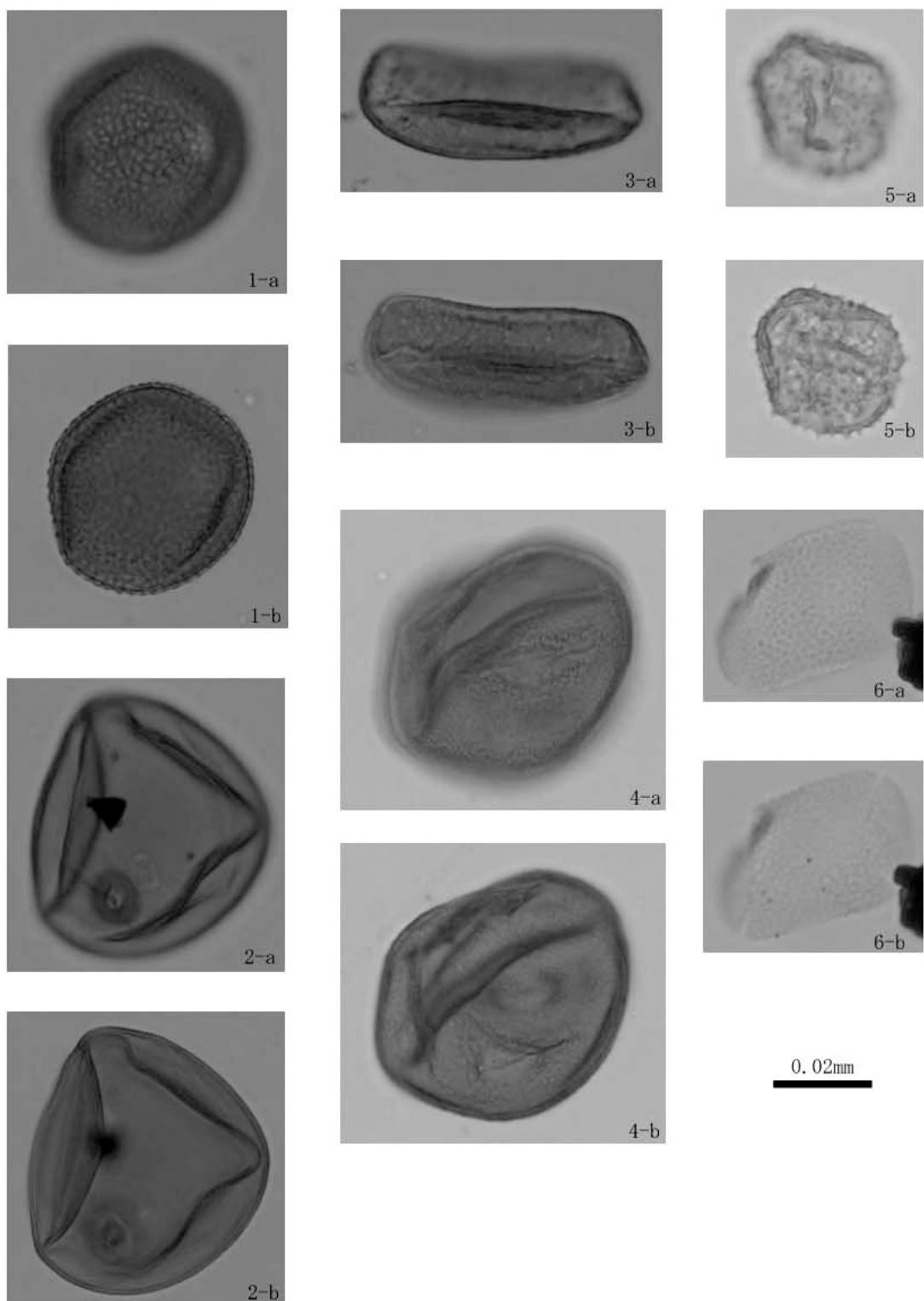
一方、低地部について示すと、試料 No. 4 ではハンノキ属、ヤナギ属などが多く産出していることから、低地にはこれらの植物を主とする湿地林が分布を広げていたと思われる。試料 No. 4 では草本花粉で湿地の環境を示す分類群が少ないが、試料 No. 3～試料 No. 1 では抽水植物であるガマ属、ミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属や、湿地性環境を好むミズバショウ属、ツリフネソウ属、アリノトウグサ属などがハンノキ属、ヤナギ属とともに産出しているため、低地に広がる湿地は堆積期間中には存在していたものと思われる。また、全ての採取試料から最も多く産出する花粉化石はイネ科花粉である。イネ科花粉は栽培種か野生種かを花粉形態から判断することが困難なため、稲作と結び付けるのが難しい。しかし、今回は全ての採取試料から高率でイネ科花粉が産出しており、試料 No. 4 以外の試料から水田雑草の分類群を含むサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などがイネ科花粉とともに産出している。このことから、試料 No. 3～試料 No. 1 の堆積期間中には水田稲作を行っていたと思われる。試料 No. 4 については他の試料に比べるとイネ科花粉の産出率が低く、シダ植物胞子が

やや多く、水田雑草の分類群を含む植物花粉が産出していないことから考えると、試料 No. 4 の堆積時期には水田稻作を行っていた可能性は低いと思われる。また、イネ科花粉は下位から上位にかけて増加傾向にあり、ハノキ属、ヤナギ属といった湿地林を形成する植物の花粉が上位で減少傾向にあることから考えると、当時の人々が低湿地を開拓し、水田を拡大していた可能性も考えられる。そうして拡大していった水田の周辺にはヨモギ属、カヤツリグサ科などの雑草も生育範囲を拡大していたかもしれない。

さらに、試料 No. 3においては栽培植物であるソバ属花粉の産出が見られることから、稻作とともにソバの栽培も行っていた可能性がある。

表1 産出花粉化石一覧表

学名	和名	試料番号			
		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4
<b>樹木</b>					
<i>Abies</i>	モミ属	3	-	5	-
<i>Tsuga</i>	ツガ属	1	-	-	-
<i>Picea</i>	トウヒ属	1	-	3	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属（複維管束亜属）	13	2	1	-
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxyylon</i>	マツ属（単維管束亜属）	1	-	-	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	-	1	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	11	22	12	2
<i>Salix</i>	ヤナギ属	4	7	10	2
<i>Platycarya</i>	ノグルミ属	-	-	1	-
<i>Juglans-Pterocarya</i>	クルミ属一サワグルミ属	3	10	20	4
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属一アサダ属	8	7	5	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	-	-	-
<i>Betula</i>	カバノキ属	16	19	4	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	26	41	64	19
<i>Fagus</i>	ブナ属	21	22	15	2
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	58	26	13	4
<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	-	6	-	-
<i>Castanea-Castanopsis</i>	クリ属一シイノキ属	4	15	2	-
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属一ケヤキ属	8	6	9	3
<i>Aphananthe-Celtis</i>	ムクノキ属一エノキ属	2	1	1	-
<i>Euptelea</i>	フサザクラ属	3	-	-	-
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウウ属	-	1	-	-
<i>Rhus-Toxicodendron</i>	ヌルデ属一ウルシ属	1	5	1	1
<i>Acer</i>	カエデ属	6	2	4	7
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	4	4	21	12
<i>Tilia</i>	シナノキ属	-	1	1	-
<i>Elaeagnus</i>	グミ属	1	-	1	-
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科	1	-	-	-
<i>Ligustrum</i>	イボタノキ属	-	-	5	-
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	3	1	-	-
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属	-	1	2	-
<b>草本</b>					
<i>Typha</i>	ガマ属	1	5	-	-
<i>Sparagnum</i>	ミクリ属	-	-	1	-
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属	2	-	-	-
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	6	12	2	-
<i>Gramineae</i>	イネ科	1223	542	408	99
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	87	17	26	7
<i>Lysichiton</i>	ミズバショウ属	5	1	1	-
<i>Eriocaulon</i>	ホシクサ属	-	1	1	-
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属	6	6	3	-
<i>Liliaceae</i>	ユリ科	-	-	2	-
<i>Moraceae</i>	クワ科	9	-	8	8
<i>Polygonum</i> sect. <i>Echinocaulon-Persicaria</i>	ウナギツカミ節一サナエタデ節	-	1	3	-
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	-	-	2	-
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科一ヒユ科	22	4	5	5
<i>Caryophyllaceae</i>	ナデシコ科	3	6	2	1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	-	1	-	-
<i>Brassicaceae</i>	アブラナ科	7	2	6	9
<i>Leguminosae</i>	マメ科	1	-	-	-
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属	-	1	3	3
<i>Rotala</i>	キカシグサ属	3	4	1	-
<i>Haloragis</i>	アリノトウグサ属	1	-	-	-
<i>Apiaceae</i>	セリ科	5	19	18	1
<i>Labiatae</i>	シソ科	-	-	1	-
<i>Justicia</i>	キツネノマゴ属	-	-	1	-
<i>Pjantago</i>	オオバコ属	-	-	-	6
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	58	53	15	4
<i>Tubuliflorae</i>	キク亜科	7	4	7	1
<i>Liguliflorae</i>	タンボボ亜科	9	4	1	1
<b>シダ植物</b>					
<i>Lycopodium</i>	ヒカゲノカズラ属	6	-	-	-
<i>Osmundaceae</i>	ゼンマイ科	-	1	-	-
Monolete type spore	单条型胞子	17	3	19	31
Trilete type spore	三条型胞子	28	-	17	8
<b>Arboreal pollen</b>					
Nonarboreal pollen	樹木花粉	200	200	200	58
Spores	草本花粉	1455	683	517	145
Total Pollen&Spores	シダ植物胞子	51	4	36	39
Unknown pollen	花粉・胞子総数	1706	887	753	242



図版1 川東遺跡（試料No. 1, No. 3）から産出した花粉化石

- |                            |                             |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. ミクリ属（試料No. 3 PLC. 86）   | 4. ブナ属（試料No. 3 PLC. 87）     |
| 2. イネ科（試料No. 1 PLC. 82）    | 5. 才モダカ属（試料No. 1 PLC. 83）   |
| 3. ミズアオイ属（試料No. 1 PLC. 84） | 6. ツリフネソウ属（試料No. 3 PLC. 85） |

## 2 川東遺跡基本土層堆積物中の珪藻化石

藤根 久 (株式会社 パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

珪藻は、10~500 $\mu\text{m}$  ほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形やこれに刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においてもわずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境、例えばコケの表面や湿った岩石の表面などで生育する珪藻種（陸生珪藻）も知られている。こうした珪藻種あるいは珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

川東遺跡は新潟県長岡市島崎地内に位置し、立地は郷本川右岸の自然堤防上である。南区の調査では、弥生時代末～古墳時代前期の土器が出土しているが、遺構・遺物とともに少なく、遺跡を評価する情報量が乏しい。ここでは、南区北壁セクションの基本土層について、堆積環境の復元を目的として珪藻分析を行った。なお、同一試料について花粉分析を行っている（花粉分析の報告を参照）。

### 2. 試料と処理方法

試料は、花粉分析と同一試料であり、南区北壁セクションから採取された4試料（上位から試料No. 1：IV層、No. 2：V層、No. 3：VI層、No. 4：VII層）である。試料No. 1は灰色の砂質粘土、試料No. 2は黄褐色の砂質粘土、試料No. 3と試料No. 4は黄褐色のやや砂質な粘土である。

各試料は、以下に示す処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

(1) 湿潤重量約1g程度取り出し、秤量した後ビーカーに移し30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を7回ほど繰り返した。(3) 残渣を遠心管に回収し、マイクロビペットで適量取り、カバーガラスに滴下し乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入しプレパラートを作製した。

作製したプレパラートは、顕微鏡下600~1000倍を用いてプレパラート全面について珪藻化石を同定・計数した。

### 3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉（1988）および安藤（1990）が設定した環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水～汽水種は不明種としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルで同定した分類群は、その種群を不明として扱った。

以下に、小杉（1988）が設定した汽水～海水域における環境指標種群と安藤（1990）が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群 (A)]：塩分濃度が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群 (B)]：塩分濃度が26~35‰の内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群 (C 1)]：塩分濃度が12~35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群 (D 1)]：塩分濃度が26~35‰の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生

活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群 (E 1)] : 塩分濃度が 12~30 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C 2)] : 塩分濃度が 4~12 パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D 2)] : 塩分濃度が 5~26 パーミルの水域の砂底（砂の表面や砂粒間）に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群 (E 2)] : 塩分濃度が 2~12 パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群 (J)] : 上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群 (K)] : 中～下流部、すなわち河川沿いに河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種は、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群 (L)] : 最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種は、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群 (M)] : 水深が約 1.5m 以上で、水生植物は岸では見られるが、水底には生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群 (N)] : 湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい。

[沼沢湿地付着生指標種群 (O)] : 水深 1 m 内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地で、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

表 1 南区北壁セクション基本土層堆積物中の珪藻化石産出表  
(種群は、小杉 (1988) と安藤 (1990) に従った)

[高層湿原指標種群 (P)] : 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現在する種群である。

[陸域指標種群 (Q)] : 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である  
(陸生珪藻と呼ばれている)。

#### 4. 珪藻化石の特徴と堆積環境

全試料から検出された珪藻化石は、海水種が 7 分類群 7 属 7 種、淡水種が 7 分類群 6 属 4 種であった。これらの珪藻化石は、海水種が 3 環境指標種群、淡水種が 1 環境指標種群に分類された (表 1)。

全体的に珪藻化石が少なく、海水種珪藻化石

分類群	種群	1	2	3	4
<i>Actinopytchus splendens</i>	?	-	1	-	-
<i>Coscinodiscus marginatus</i>	A	1	2	-	2
<i>C.</i> spp.	?	2	2	1	-
<i>Grammatophora macilenta</i>	?	-	2	1	-
<i>Navicula fermentariae</i>	?	-	1	-	-
<i>Palaria sulcata</i>	B	-	1	2	1
<i>Thalassionema nitzschioides</i>	A	-	1	-	-
<i>Diploneis smithii</i>	E1	-	1	-	-
<i>Cocconeis placentula</i>	W	-	-	1	-
<i>Cymbella</i> spp.	?	-	-	1	-
<i>Eunotia</i> spp.	?	-	-	-	1
<i>Melosira pensacolae</i>	N	-	1	-	-
<i>Navicula cuspidata</i>	W	-	2	-	-
<i>N.</i> spp.	?	-	2	-	-
<i>Pinnularia cardinaliculus</i>	W	-	1	-	-
<i>P.</i> spp.	?	3	4	-	-
外洋 (A)		1	3	-	2
内湾 (B)		-	1	2	1
海水泥質干潟 (E1)		-	1	-	-
海水不定・不明種 (?)		2	6	2	-
湖沼沼沢湿地 (N)		-	1	-	-
広布 (W)		-	3	1	-
淡水不定・不明種 (?)		3	6	1	1
珪藻殻数		6	21	6	4

の出現がやや目立ち、淡水種珪藻化石は少ない。検出された海水種珪藻化石は、基盤の海成層中に含まれる珪藻化石の再堆積と考えられる。

花粉分析では、試料 No. 4 では草本花粉で湿地的環境を示す分類群が少ないが、試料 No. 1～試料 No. 3 では抽水植物であるガマ属、ミクリ属などや湿地性環境を好むミズバショウ属などが産出していることから、湿地環境と推定される。

珪藻化石は、水成環境においても、強い酸性土中では珪藻殻が溶出することがあり (Murakami, 1996)、珪藻化石が堆積物中において保存されなかつたと考えられる。

## 5. おわりに

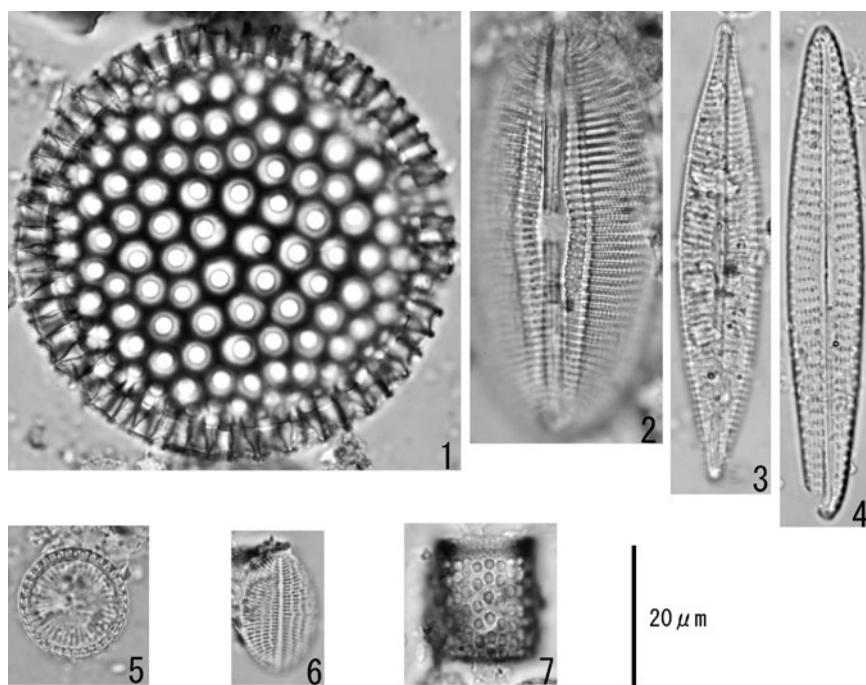
南区北壁セクション（基本土層）から採取された4試料について珪藻分析を行った。その結果、いずれの試料においても珪藻化石は少なく、基盤の海成層に由来する海水種珪藻化石の出現がやや目立った。なお、試料 No. 1～試料 No. 3 の花粉分析では抽水植物や湿地性環境を好む花粉化石が産出していることから、湿地環境と推定された。珪藻化石が少なかつたのは、珪藻化石が強い酸性土中にあつたため、珪藻殻が溶出したことが原因と考えられる。

## 引用文献

安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, 73-88.

小杉正人 (1988) 硅藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 第四紀研究, 27, 1-20.

Murakami , T. (1996) Silicious Remains Dissolution at Sphagnum-bog of Naganoyama Wetland in Aichi Prefecture, Central Japan. 第四紀研究, 35, 17-23.



図版1 南区北壁セクション基本土層堆積物中の珪藻化石

1. *Coseinodiscus marginatus* (No. 4)
2. *Diploneis smithii* (No. 2)
3. *Navicula sp.* (No. 2)
4. *Navicula formenterae* (No. 2)
5. *Palaria sulcata* (No. 2)
6. *Cocconeis placentula* (No. 3)
7. *Melosira pensacolae* (No. 2)

### 3 長岡市川東遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

#### 1. 試料

試料は長岡市川東遺跡から出土した建築部材 6 点である。

#### 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

#### 3. 結果

樹種同定結果（広葉樹 1 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

##### 1) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

（遺物 No. 1～6）

（写真 No. 1～6）

環孔材である。木口では円形ないし橢円形で大体単独の大道管（～500μm）が年輪にそって幅のかなり広い孔圈部を形成している。孔圈外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは 2～3 個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は單穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木纖維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

#### ◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載 I～V」 京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編 I・II」 保育社（1979）

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）

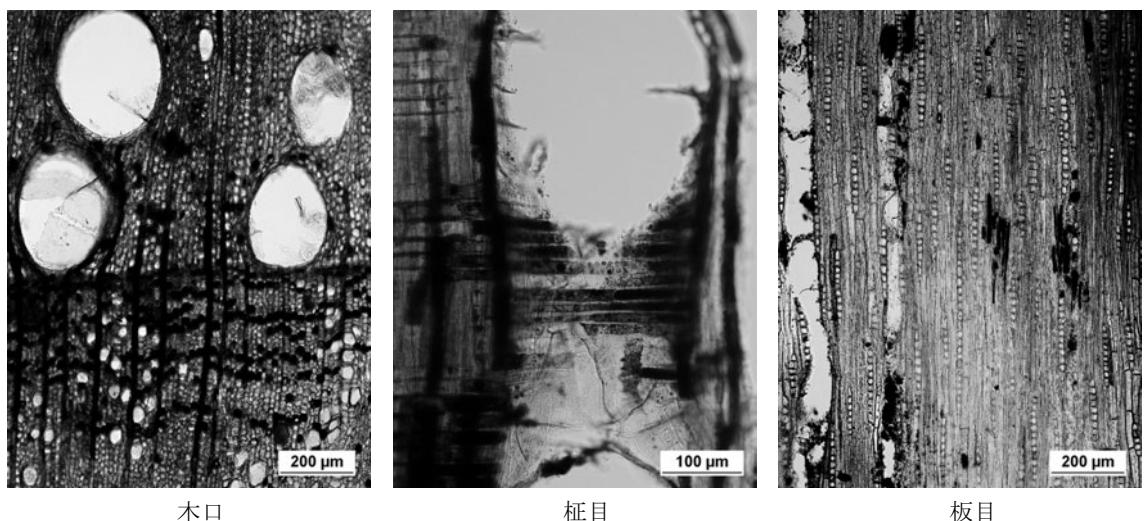
奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

#### ◆使用顕微鏡◆

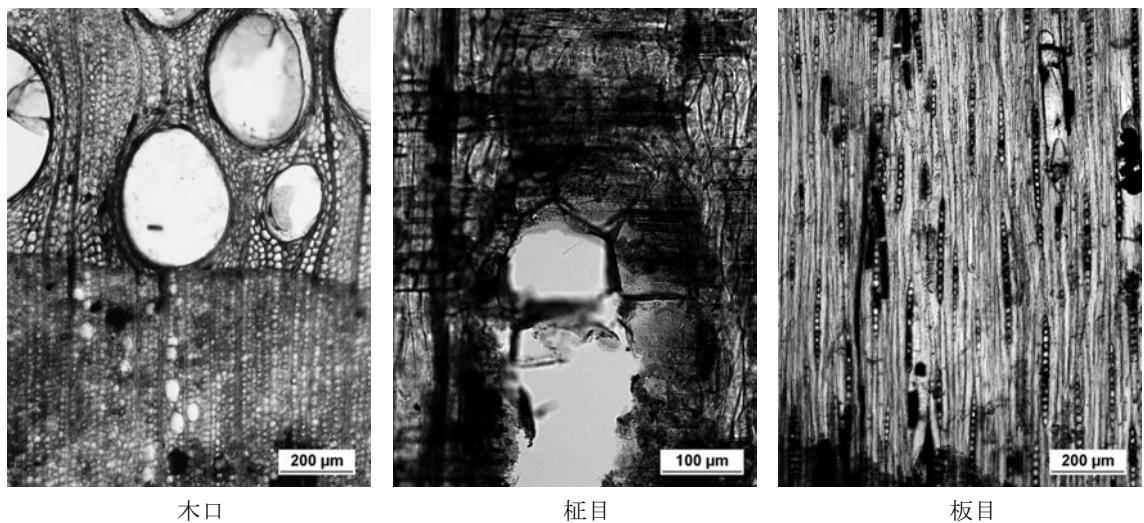
Nikon DS-Fi1

長岡市川東遺跡出土木製品同定表

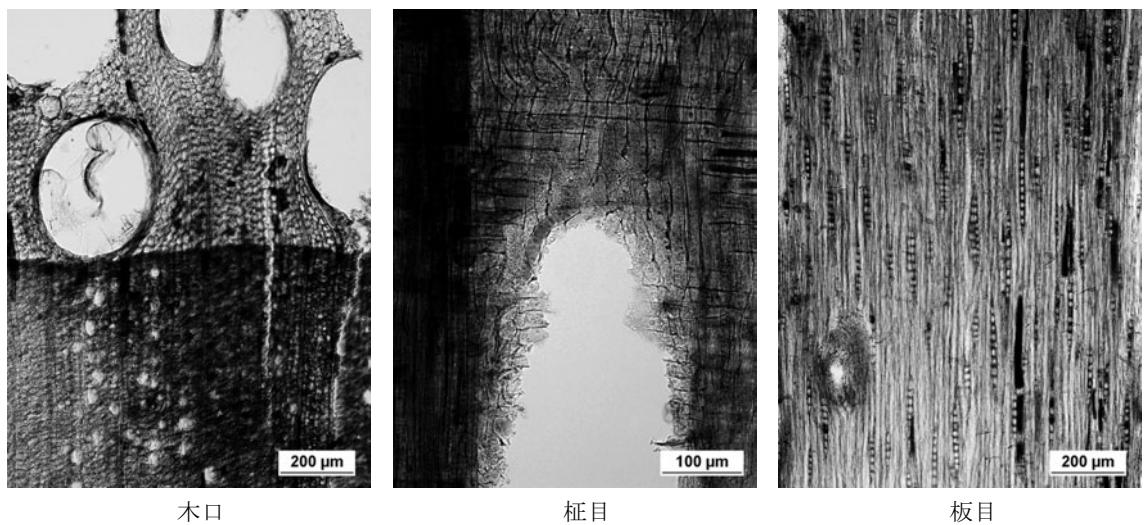
No.	出土位置	品名	樹種
1	P 10	柱根	ブナ科クリ属クリ
2	P 21	柱根	ブナ科クリ属クリ
3	P 25	柱根	ブナ科クリ属クリ
4	P 14	柱根	ブナ科クリ属クリ
5	P 37	柱根	ブナ科クリ属クリ
6	P 18	柱根	ブナ科クリ属クリ



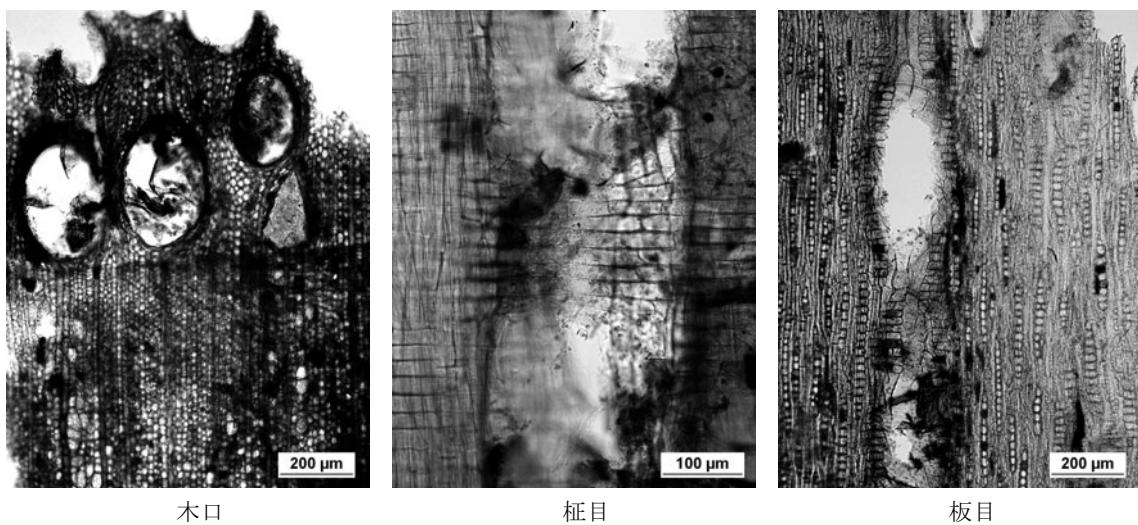
No. - 1 ブナ科クリ属クリ



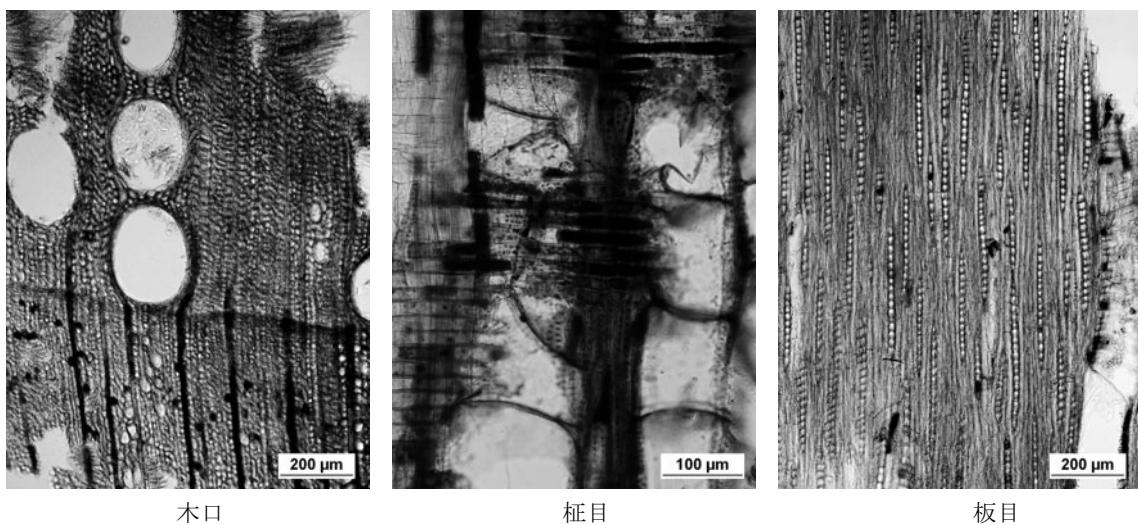
No. - 2 ブナ科クリ属クリ



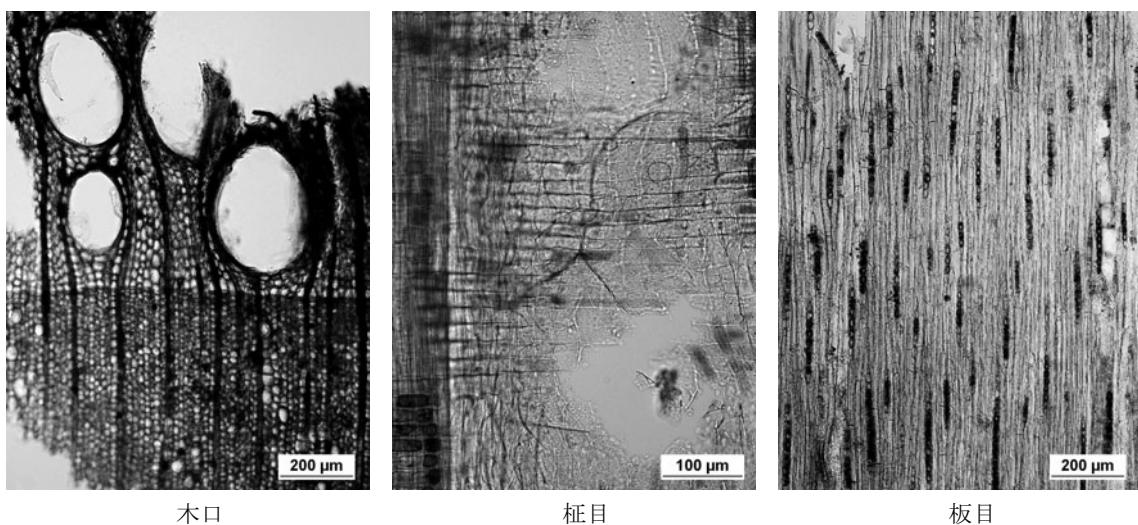
No. - 3 ブナ科クリ属クリ



No. - 4 ブナ科クリ属クリ



No. - 5 ブナ科クリ属クリ



No. - 6 ブナ科クリ属クリ

## 第VI章　まとめ

川東遺跡は、郷本川河川改修に伴い行われた発掘調査で、調査面積は約1,200m<sup>2</sup>である。今回の調査では、旧流路、溝、掘立柱建物跡、土坑、ピットなどの遺構と古墳時代前期と平安時代の土器、柱根などの遺物が発見された。調査区は西区・南区・北区の3区に分かれているが、遺構・遺物の出土状況は大きく分けて西区・南区と北区の2つに分けることができる。

西区西側調査区では、主に旧流路や溝が検出された。S R 3～5は、下位の状況が不明であるが、上位からは9世紀の土器が出土していることから、この頃までは存続していたものと思われる。西区東側調査区と南区では土坑・ピットが主体となる。残念ながら、建物等に結びつくような遺構は発見されなかつた。南区では遺構も稀薄になるため、今回の調査区は集落の縁辺部に位置するものと考えられ、集落の中心部は更に西方に位置するものと推定される。

出土遺物は主に古墳時代前期の遺物が出土した。出土遺物の主体は、北陸系の土師器であるが、北陸系の土器のほかには、畿内系の叩き甕(46)が出土している。叩き甕は、寺泊の草薙遺跡からも出土しており、わずかではあるが資料が増加している。その伝播ルートは、当地域への古墳の伝播ルートと合わせて今後検討していく必要があろう。

北区では、掘立柱建物跡が2棟発見された。その年代は、柱穴から年代が分かる遺物の出土はないが、包含層から出土している遺物の形態、佐渡小泊産の須恵器が主体であることなどから9世紀後半に位置づけられるものと思われる。さらに、建物の主軸はほぼ南北方向となり、下ノ西遺跡や八幡林遺跡で見られる主軸方向の分類に当たはめると9世紀後半から10世紀初頭に位置づけられ、出土遺物の年代とも矛盾しない。本遺跡は、掘立柱建物は大型の建物ではなく、出土遺物にも特殊な遺物が含まれていないことから、一般集落であると考えられる。

北区から「泉田西庄」と書かれた墨書き土器が発見された。これまで周辺では「庄」1文字の墨書きであれば八幡林遺跡から出土しているが、具体的な荘園名が書かれている墨書き土器は、長岡市では初出である。新潟県内で荘園名が書かれている墨書き土器の事例は、岩ノ原遺跡(上越市)の「石井庄」、馬越遺跡(加茂市)の「妙越庄」が挙げられる。岩ノ原遺跡は、9世紀前半に位置づけられ、東大寺領石井庄の荘所であることが明らかとなっている。馬越遺跡は、8世紀中ごろから10世紀前半に及ぶ大規模な集落遺跡であり、9世紀後半の須恵器無台坏に「妙越庄」と書かれているが、文献資料には出てこず周辺には見られない地名である。本遺跡で出土した「泉田西庄」もまた文献資料には出てこない地名である。

この「泉田」については本遺跡に近接して位置している、出田(いづるた)神社が参考になろう。出田神社は、『延喜式』に記載されている式内社の小丹生神社と考えられており、現在の島崎地区に位置する宇奈具志神社の前身で、養老年間(717～724年)には存在していたと言われている。これを事実とするならば、出田神社は、本遺跡が営まれていた9世紀後半には、存在していたということになる。「いづるた」と「いづみだ」とが音が近いことから関連があるようにも思えるが、詳細は不明であり、今後の資料の増加に期待しつつ課題したい。

また、もう一つの課題としては、荘域の問題がある。その範囲については不明と言わざるを得ないが、本遺跡の北東約1kmの沖積地の微高地に位置する門新遺跡からも「泉田」に関連した遺物が出土している。門新遺跡は、10世紀第2四半期を最盛期とする旧島崎川流域の沖積地を積極的に開拓し成長した領主層の

居宅と考えられている遺跡である。その中の井戸（S E 10）から「泉田」と書かれている須恵器有台鉢（第5図）が出土している。報告時には「泉内」と見られ、井戸廃絶時の祭祀に関わる遺物と解釈されていたが、今回改めて見直し、「泉田」と読めることが判明した。川東遺跡から出土したものには「西」についているため、門新遺跡を中心部としてその西方に位置するということなのか、あるいはそれ以外の何かを示すものであるのか、 第5図 門新遺跡出土「泉田」墨書土器今後の資料の増加を待って検討したい。

9世紀後半から10世紀前半の当地域の状況を概観してみると、8世紀から地方支配の中枢施設として存在していた八幡林遺跡では大型の建物が廃絶し、官衙的な要素が稀薄となり一般集落とあまり差がなくなる。一方、八幡林遺跡とは対照的に、下ノ西遺跡では大型建物が次々に造営され、官衙関連の施設としての役割を持っていたものと考えられる。しかし、10世紀前半には両遺跡は廃絶し、新たに門新遺跡が台頭してくる。このように、当地域の様相は、9世紀後半から10世紀前半に大きな変化が見られるが、その中で10世紀前半には衰退・荒廃したとされる初期荘園が当地域ではどのように存在していたのか、今後の検討課題である。



## 参考文献

- 新潟県教育委員会 1984 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
- 坂井 秀弥 1988 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』  
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 和島村教育委員会 1995 『和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡』
- 和 島 村 1998 『和島村史 通史編』
- 和島村教育委員会 2003 『和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV』
- 相田 泰臣 2005 「信濃川左岸地域の様相」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 加茂市教育委員会 2005 『加茂市文化財調査報告(14) 馬越遺跡』
- 滝沢 規朗 2005 「土器の分類と変遷—いわゆる北陸系を中心に—」『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』同シンポジウム実行委員会・新潟県考古学会
- 春日 真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—」『新潟考古』第16号
- 和島村教育委員会 2005 『和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡IV』
- 新潟県教育委員会ほか 2008 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第182集 岩ノ原遺跡』
- 長岡市教育委員会 2009 『平成20年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』
- 長岡市教育委員会 2011 『平成22年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』

第1表 遺物観察表  
 ※治土 石英(英) 長石(長) チャート(チャ) 雲母(雲) 砂粒(砂) 黒色粒子(黒) 赤色粒子(赤) 海綿骨針(海) 黒い吹出し(黒吹)

土器観察表

No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径	底径 (長さ)	器高	胎土	色調(外/内)	調整等外	調整等内	備考
1	西	A6-24	SR1	土師器	高杯	(23.6)	(2.7)	砂	(1.5)	英・長	にぶい黄橙/にぶい黄橙	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	ナデ
2	西	A6-24	SR1	土師器	甕or壺	14.8	7.0	3.6	英・長・黒	灰白/灰白				底部へ切り
3	西	A6-24	SR1	須恵器	無台杯									
4	西	A6-24	SR1	土師器	甕									
5	西	B5-4	SR2	2層	土師器		3.3	(5.4)	英・長	明オリーブ灰/明青灰	格子目タスキのちカキ目	同心円文当て具		底部穿孔(径0.8cm)
6	西	B5-4	SR2	2層	土師器		2.8	(3.5)	英・チャ	灰白/黒褐	ケズリ	モザイクのため調整せず		底部穿孔(貫通せず)
7	西	B5-4	SR2	2層	土師器	結合器台		(4.7)	長・チャ・赤	浅黃橙/赤褐	ハケ・ナデ・ミガキ	モザイクのため調整せず		内外面赤彩
8	西	B5-4	SR2	2層	土師器	器台	10.9	(5.8)	英・長	にぶい黄橙/にぶい黄橙	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ
9	西	B5-4	SR2	2層	土師器	高杯		12.4	(7.3)	砂	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ
10	西	B5-4	SR2	2層	土師器	高杯	13.9	(7.2)	英・長	橙/橙	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ・ミガキ
11	西	B5-4	SR2	2層	土師器	高杯		(5.5)	英・チャ	灰白/灰白	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ・ミガキ
12	西	B5-4	SR2	2層	土師器	壺		(3.5)	英・長	燈/燈	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ・指压痕
13	西	B5-4	SR2	2層	土師器	壺				英・長	淡檸/檸	ミガキ	モザイクのため調整せず	ナデ
14	西	B5-4	SR2	2層	土師器	壺		(10.3)	英・長・赤	灰白/灰白	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ
15	西	B5-4	SR2	2層	土師器	壺		(3.4)	英・長	明赤褐/黒褐	ミガキ	モザイクのため調整せず		ナデ
16	西	B5-4	SR2	2層	土師器	壺		4.0	(8.3)	長・海	淡黄橙/にぶい黄橙	ミガキ	モザイクのため調整せず	ナデ
17	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕		5.4	(14.3)	英・長	灰黄橙/にぶい黄橙	ミガキ	モザイクのため調整せず	ナデ
18	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.7			横ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
19	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
20	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
21	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
22	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
23	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
24	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
25	西	B5-4	SR2	2層	土師器	甕			17.1			ナデ・ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
26	西	B5-1	SR3	土師器	甕				5.3	(2.2)	英・長	浅黄橙/碧	モザイクのため調整せず	ナデ
27	西	B5-1	SR3	土師器	甕				7.0	(3.0)	長	にぶい澄/灰	モザイクのため調整せず	ナデ
28	西	B5-1	SR3	須恵器	甕						にぶい澄/黄灰	モザイクのため調整せず	ナデ	ナデ
29	西	B5-1	SR3	須恵器	甕						にぶい黄澄/灰	モザイクのため調整せず	ナデ	ナデ
30	西	B5-1	SR3	須恵器	甕						長	にぶい黄澄/黑褐	モザイクのため調整せず	ナデ
31	西	B4-3	SR4	須恵器	有台杯				21.8		(2.5)	英・長・チャ	摩滅のため調整不明	ナデ
32	西	B3-1~5	SR5	須恵器	有台杯							ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
33	西	B3-1~5	SR5	須恵器	長頸瓶							格子目タスキのちカキ目	同心円文当て具	
34	西	B3-1~5	SR5	須恵器	瓶類							格子目タスキのちカキ目	同心円文当て具	
35	西	B3-1~5	SR5	須恵器	円腹硯							平行タスキのちカキ目	同心円文当て具	
36	西	B3-1~5	SR5	須恵器	甕							平行タスキのちカキ目	同心円文当て具	
37	西	B3-1~5	SR5	須恵器	甕							ハケ	モザイクのため調整せず	ナデ
38	西	B3-1~5	SR5	土師器	長甕							モザイクのため調整せず	ナデ	
39	西	B3-1~5	SR5	土師器	椀							モザイクのため調整せず	ナデ	
40	西	B3-1~5	SR5	土師器	鍋							モザイクのため調整せず	ナデ	
41	西	B2-2~5	SR6	土師器	鉢							モザイクのため調整せず	ナデ	

No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径	底径 (長さ)	器高	胎土	色調(外/内)	調整等外	調整等内	備考
42	西	B2-2~5	SR6	土師器	壺	14.0	(3.8)	英・長・赤	浅黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	内外面赤彩		
43	西	B2-2~5	SR6	土師器	壺	14.5	(5.1)	英・長・チャ	赤褐/灰白	ミガキ	ナデ・ハケ			
44	西	B2-2~5	SR6	土師器	甕	15.1	(2.7)	英・長・チャ	增灰/灰白	ナデ・ハケ				
45	西	B12-1	SK3	土師器	甕	14.9	(5.0)	英・長	にぶい澄/澄	摩滅のため調整不明	ハケ	横ナデ		
46	西	B12-1	SK3	土師器	甕	14.9		英	灰褐/褐灰	タキ				
47	西	B11-14	SK4	土師器	器台	6.8	(4.0)	英・長・赤	黄灰/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	内外面赤彩		
48	西	A11-6	SK5	土師器	器台		(5.2)	英・雲	明褐/明褐	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
49	西	A11-6	SK5	土師器	甕	3.8	(8.5)	長・赤	浅黄澄/褐灰	摩滅のため調整不明	ミガキ	ミニチュア土器		
50	西	A9-17	SK6	土師器	高杯	17.8	(3.2)	英・長・赤	明赤褐/明赤褐	摩滅のため調整不明	ミガキ	内外面赤彩		
51	西	B8-9	SK8	土師器	蓋		(2.1)	英	にぶい赤/赤	ミガキ	ミガキ	内外面赤彩		
52	西	B8-9	SK8	土師器	高杯		(7.2)	英・長	赤/赤	ミガキ	ミガキ	内外面赤彩		
53	西	B8-9	SK8	土師器	器台	11.2	(8.8)	英・赤	浅黄/にぶい黄澄	ミガキ	ミガキ	内外面赤彩		
54	西	A6-20	SK14	土師器	甕		(4.7)	(4.9)	英	にぶい澄/褐灰	ハケ			
55	西	A11-16	P26	土師器	甕	14.6	(4.1)	英・チャ	黑褐/澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	内外面赤彩		
56	西	A11-16	P26	土師器	蓋		(2.9)	英・雲	にぶい澄/にぶい澄	ナデ	穿孔あり			
57	西	A11-12	包含層	土師器	甕		(2.9)	英	にぶい澄/にぶい澄	ナデ				
58	西	A12-18	包含層	土師器	器台	8.7	(6.2)	英・長	浅黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
59	西	B2-3	排水溝	土師器	器台		(3.9)	英・チャ	赤褐/淡黄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
60	西	B12-1	包含層	土師器	器台		(5.3)	英・長・チャ	浅黄/浅黄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
61	西	A12-19	包含層	土師器	高杯		(4.8)	長・赤	褐灰/褐灰	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
62	西	A12-18	包含層	土師器	高杯		(10.1)	英・長	浅黄/浅黄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
63	西	A2-2	包含層	土師器	高杯	19.4	(4.5)	長・海	浅黄澄/にぶい澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
64	西	A4-22	排水溝	土師器	壺	14.5	8.1	4.9	英	浅黄澄/黒	ミガキ	内面黒色処理		
65	西	B12-2	包含層	土師器	鉢		(4.8)	英・長	灰白/灰白	摩滅のため調整不明	ミガキ			
66	西	B2-2	排水溝	土師器	鉢		(4.7)	英・赤	にぶい澄/澄	摩滅のため調整不明	ミガキ			
67	西	B12-2	包含層	土師器	壺	11.5	(4.5)	英・長	にぶい黄澄/灰白	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
68	西	B3-3	排水溝	土師器	壺	16.0	(4.8)	英・長・赤	灰白/灰白	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
69	西	B12-1	包含層	土師器	壺	15.6	(5.0)	英・長	澄/灰白	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
70	西	A12-17	包含層	土師器	壺	15.0	(4.1)	長	淺黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
71	西	A12-18	包含層	土師器	壺		(5.2)	長・チャ	浅黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
72	西	B2-3	排水溝	土師器	壺		(6.4)	長・チャ	にぶい澄/にぶい澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
73	西	A12-18	包含層	土師器	壺		(5.1)	(3.8)	英・長・チャ	浅黄澄/暗灰	ハケ	横ナデ		
74	西	B2-3	排水溝	土師器	甕	18.0	(9.8)	英・長・チャ	灰白/灰白	ハケ	ハケ・ナデ	外表面ス付着		
75	西	B2-5	排水溝	土師器	甕	23.0	(3.9)	長・赤	浅黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	横ナデ			
76	西	B2-5	排水溝	土師器	甕	18.2	(5.1)	長・赤	にぶい澄/にぶい澄	摩滅のため調整不明	横ナデ			
77	西	A12-18	包含層	土師器	甕	18.0	(2.3)	長	灰白/灰白	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
78	西	—	排水溝	土師器	甕	17.6	(3.0)	英・長	浅黄澄/暗灰	ナデ	ナデ			
79	西	A12-18	包含層	土師器	甕	16.9	(3.3)	長	浅黄澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
80	西	B2-3	包含層	土師器	甕	17.0	(3.6)	英・赤	にぶい澄/にぶい澄	ナデ	ナデ			
81	西	B5-6	排水溝	土師器	甕	14.0	(2.3)	英・赤	淡赤澄/浅黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
82	西	B2-3	排水溝	土師器	甕		(10.1)	長・赤	灰白/灰白	ハケのち部分的にナデ	ナデ			
83	西	B2-3	排水溝	土師器	甕		(6.0)	英・長	にぶい澄/明麗灰	ナデ	ナデ			
84	西	A12-17	包含層	土師器	甕			長	にぶい澄/にぶい黄澄	摩滅のため調整不明	ミガキ	ナデ		
85	西	A12-17	包含層	土師器	甕or壺			英・長	にぶい黄澄/灰白	ハケ	ナデ	一部スス付着		
86	西	A12-19	包含層	土師器	土瓶	径3.9	(2.8)	英・チャ	浅黄/浅黄	ハケ	ナデ	孔径0.8cm		
87	西	A2-2	包含層	須恵器	無台杯	9.8	(1.9)	長・黒・黒	灰/灰			底部へラ切り		

No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径	底径 (長さ)	器高	胎土	色調(外/内)	調整等外	調整等内	備考
88	西	A6-18	排水溝	須恵器	無台杯	13.6	9.0	3.8	長・黒	灰/灰				底部へラ切り
89	西	B3-3	排水溝	須恵器	長頸瓶		10.0	(4.6)	英・長・黒	灰白/灰白				底部外面に指圧痕
90	西	A2-2	包含層	須恵器	甕				長・黒・黒	灰/灰白	格子目タタキ	同心円文當て具		
91	西	—	包含層	須恵器	甕				長・黒	灰/灰白	格子目タタキ	同心円文當て具		
92	西	B6-7	包含層	須恵器	甕				長・黒	灰白/灰白	格子目タタキ	同心円文當て具		
93	西	B4-5	排水溝	須恵器	甕				英・長・黒	青灰/青灰	格子目タタキ	同心円文當て具		
94	西	—	排水溝	須恵器	甕				長・黒・黒	灰/灰	格子目タタキ	同心円文當て具		
95	西	B3-3	排水溝	土師器	鍋	(34.1)		(4.1)	長	淺黄澄/浅黃澄	格子目タタキのちカキ目	同心円文當て具		
96	南	B14-9	SD1	土師器	甕	14.5		(3.4)	英・長・赤	にぶい黄澄/にぶい黄澄	ヨコナデ	ヨコナデ		
97	南	B14-4	SD1	土師器	甕	18.0		(3.7)	英	にぶい黄澄/淡黄	ハケ・ヨコナデ	摩滅のため調整不明		
98	南	B14-9	SD1	土師器	甕	14.3		(4.2)	長・赤	浅黄澄/灰白	ハケ後ヨコナデ	ハケ後ヨコナデ		
99	南	B14-5	SD1	土師器	高杯	11.0	(6.0)	長・赤	橙/橙	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	透かし穴3ヶ所	
100	南	B14-15	SD1	須恵器	無台杯	13.0	(3.3)	英・長・黒	灰/灰					
101	南	B15-17	SD2	土師器	甕	19.3	(3.2)	英・長	明黄褐/明黃褐	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ		
102	南	B14-20	SD2	土師器	高杯		11.9	(7.4)	英・長	にぶい黄澄/にぶい黄澄	ミガキ	ミガキ		
103	南	B14-19	SD2	須恵器	横瓶			(26.1)	長・黒	灰白色/青灰色	平行タキ・カキ目	同心円文當て具		
104	南	B15-16	SD3	土師器	高杯	10.0	(8.6)	英・長	橙/橙	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	摩滅のため調整不明	透かし穴4ヶ所	
105	南	B14-7	包含層	土師器	器台		(5.6)	英・長	にぶい黄褐/にぶい黄褐	明黄褐/明黃褐	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	
106	南	B14-2	包含層	土師器	高杯		7.1	(4.7)	英・長	にぶい黄澄/にぶい黄澄	ミガキ	ミガキ		
107	南	—	表土	土師器	甕				英・チヤ	明褐灰/浅黃澄	ハケ	ハケ		
108	南	B14-15	包含層	土師器	甕	20.7		(10.3)	英・長	灰褐/橙	ハケ後ヨコナデ・ケズリ	ハケ後ヨコナデ	ハケ後ナデ	
109	南	—	廢土	須恵器	無台杯	12.1	8.6	3.1	長・黒	灰/灰				
110	南	—	包含層	須恵器	甕			(7.3)	長・黒	灰白/灰白				
111	南	—	表土	須恵器	瓶類			(6.8)	長・黒	灰色/綠灰色	カキ目			
112	南	B14-18	包含層	須恵器	甕	21.0		(4.6)	長・黒	灰白/灰白	ハケのちロクロナデ			
113	南	B14-12	P6	須恵器	甕				長・黒	黄灰/灰白	平行タキ	平行タキ	同心円文當て具	
114	北	—	P36	須恵器	無台杯	12.1	6.6	2.1	英・長・黒	灰/灰				
115	北	—	SX6	須恵器	蓋			(1.3)	英・長・黒	灰/灰				
116	北	—	SX6	須恵器	蓋			12.8	(2.1)	長・黒	灰白/灰白	上部へラケズリ		
117	北	—	包含層	須恵器	蓋			13.6	(1.6)	長	灰白/灰白			
118	北	—	包含層	須恵器	無台杯			11.6	(2.5)	英・長・黒	灰白/灰			
119	北	—	包含層	須恵器	無台杯			13.4	(3.2)	英・長	灰/灰白			
120	北	—	包含層	須恵器	無台杯				8.0	(2.0)	長・黒	灰/灰		
121	北	—	包含層	須恵器	無台杯				7.4	(1.8)	英・長・黒	灰/灰		底部へラ切り後ナデ
122	北	—	包含層	須恵器	有台杯				7.6	(2.8)	長・黒	灰白/灰白		底部へラ切り後ナデ
123	北	—	包含層	須恵器	有台杯				8.2	(3.5)	英・長・黒	灰/灰白		底部へラ切り後ナデ
124	北	—	包含層	須恵器	無台杯				12.2	6.8	3.8	英		灯明皿・底部回転糸切り
125	北	—	包含層	須恵器	無台杯				7.0	(1.4)	英・長・黒	灰白/灰白		転用硯・周囲打ち欠き
126	北	—	包含層	須恵器	短颈甕	12.0			(3.0)	長・黒	灰白/灰白			
127	北	—	包含層	須恵器	短颈甕				9.8	(7.5)	長・黒	灰白/灰白		
128	北	—	包含層	須恵器	瓶類				14.0	(6.2)	長・黒	灰黃/灰白		
129	北	—	包含層	須恵器	甕				30.1	(5.9)	長・黒	灰/灰白		
130	北	—	包含層	須恵器	甕				37.9	(8.7)	英・長	灰白/灰白		
131	北	—	包含層	須恵器	甕							カキ目	同心円文當て具	
132	北	—	包含層	須恵器	甕									

No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	器種	口径	底径(長さ)	器高	胎土	色調外/内	調整等外	調整等内	備考
133	北	—	包含層	須恵器 甕	須恵器 甕	甕			英・長・黒	灰/黄灰	格子目タタキ			同心円文當て具
134	北	—	包含層	須恵器 甕	須恵器 甕	甕		4.8	(2.4)	長・黒	暗灰/灰白	格子目タタキ		同心円文當て具
135	北	—	包含層	土師器 椀	土師器 椀	椀		6.4	(2.5)	英・長・赤	淺黃澄/幾黃澄			口クロ整形
136	北	—	包含層	土師器 小甕	土師器 小甕	小甕	14.4	(5.5)	英・長・赤	淡赤澄/澄			口縁部スス付着	
137	北	—	—	須恵器 有台杯	須恵器 有台杯	有台杯	10.6	5.7	4.4	英・長	灰白/灰白			底部へラ切り
138	工事立会	—	—	須恵器 有台杯	須恵器 有台杯	有台杯	13.0	—	(5.0)	長・黒	明オリーブ灰/明オリーブ灰			
139	工事立会	—	—	須恵器 有台杯	須恵器 有台杯	有台杯	12.9	7.4	6.7	長・黒	灰白/灰白			
140	工事立会	—	—	須恵器 横瓶	須恵器 横瓶	横瓶		(21.4)	長・黒	灰白/灰白	格子目タタキ			底部へラ切り
141	工事立会	—	—	須恵器 長頸瓶	須恵器 長頸瓶	長頸瓶		(5.6)	英・長・黒	灰/灰	格子目タタキ			同心円文當て具
142	工事立会	—	—	須恵器 長頸瓶	須恵器 長頸瓶	長頸瓶		(7.5)	英・長・黒	灰白/灰				
143	工事立会	—	—	須恵器 甕	須恵器 甕	甕	22.6	(4.2)	長・黒	灰白/暗オリーブ				
144	工事立会	—	—	須恵器 甕	須恵器 甕	甕		英・長	灰白/灰白	格子目タタキ				
145	工事立会	—	—	須恵器 甕	須恵器 甕	甕			英・長・黒	青灰/明青灰	格子目タタキ・カキ目			同心円文當て具
146	工事立会	—	—	土師器 椀	土師器 椀	椀		6.5	(2.3)	長・赤	淺黃/澄			底部回転糸切り
147	工事立会	—	—	土師器 椀	土師器 椀	椀	5.4	(1.7)	英・長	灰白/灰白				底部回転糸切り
148	工事立会	—	—	須恵器 甕	須恵器 甕	甕	(58.4)	(13.9)	英・長・黒	灰白/灰	カキ目	ハケのちナデ		内外面赤彩
149	工事立会	—	—	土師器 高杯	土師器 高杯	高杯	28.6	(1.2)	英・雲	赤/赤	ミガキ	ミガキ		ハケ・ミガキ
150	表探	—	—	土師器 壺	土師器 壺	壺	21.1	(3.4)	英・長	灰黄鶴/灰黄鶴	ハケ・ミガキ			ナデ
151	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕	16.9	(7.6)	英・雲	澄/淺黃澄	ナデ			
152	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕	18.3	(6.1)	英・海	にぶい黄澄/浅黃澄	ナデ・ハケ			
153	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕	16.1	(4.3)	英・長	增灰革/にぶい黄澄	ハケ・ナデ			
154	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕	16.3	(3.8)	英・雲	淺黃澄/にぶい黄澄	ナデ・ハケ			口縁部スス付着
155	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕		(4.1)	英	にぶい澄/にぶい黄	ナデ			内面スス付着
156	表探	—	—	土師器 鉢	土師器 鉢	鉢		(4.3)	英	澄/にぶい澄	ナデ・ハケ			
157	表探	—	—	土師器 壺	土師器 壺	壺		(2.7)	英・長	明赤鬼/赤橙	ミガキ			
158	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕	4.8	(3.1)	英	明黄鶴/暗灰	ハケ			
159	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕			英・長・雲	にぶい黄澄/にぶい黄澄	ハケ・ミガキ			
160	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕			英・チャ	灰白/褐灰	ハケ・ミガキ			
161	表探	—	—	土師器 甕	土師器 甕	甕								

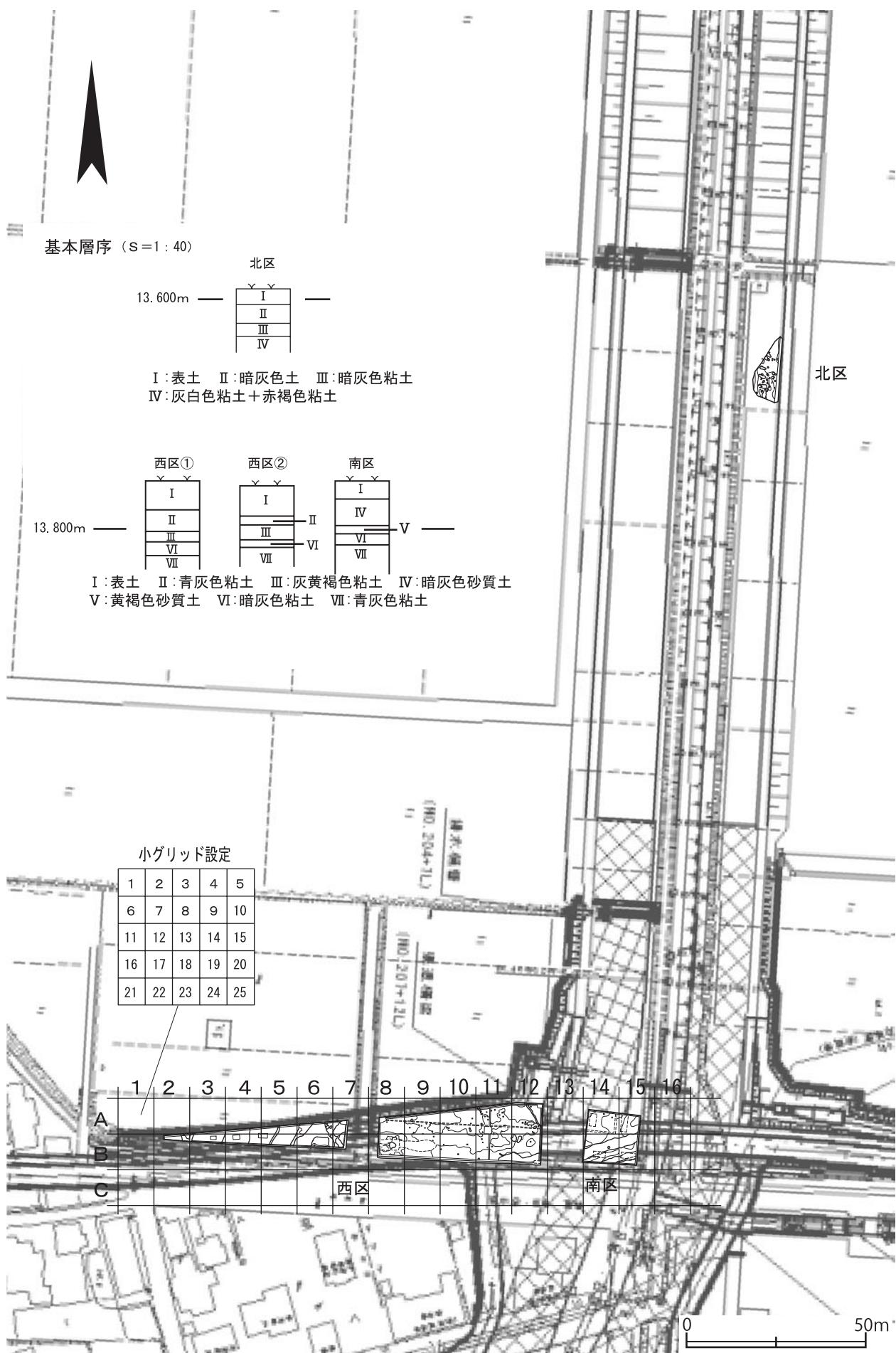
No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	錢名	初鑄年	直径(cm)	重さ(g)	厚さ(cm)	備考
162	北	B14-17	包含層	—	鋳貨	寛永通宝	1636年	2.1	1.6	14.2	
163	南	B14-18	包含層	—	鋳貨	景元通宝	1004年	2.5	3.1	9.5	

### 木製品観察表

No.	調査区	グリッド	遺構名	層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
164	北	—	P37	—	柱材	20.1	17.3		
165	北	—	P25	—	柱材	41.9	9.8		
166	北	—	P14	—	柱材	49.1	14.3		
167	北	—	P18	—	柱材	19.5	10.3		
168	北	—	P10	—	柱材	56.3	13.5		
169	北	—	P21	—	柱材	47.4	22.9		

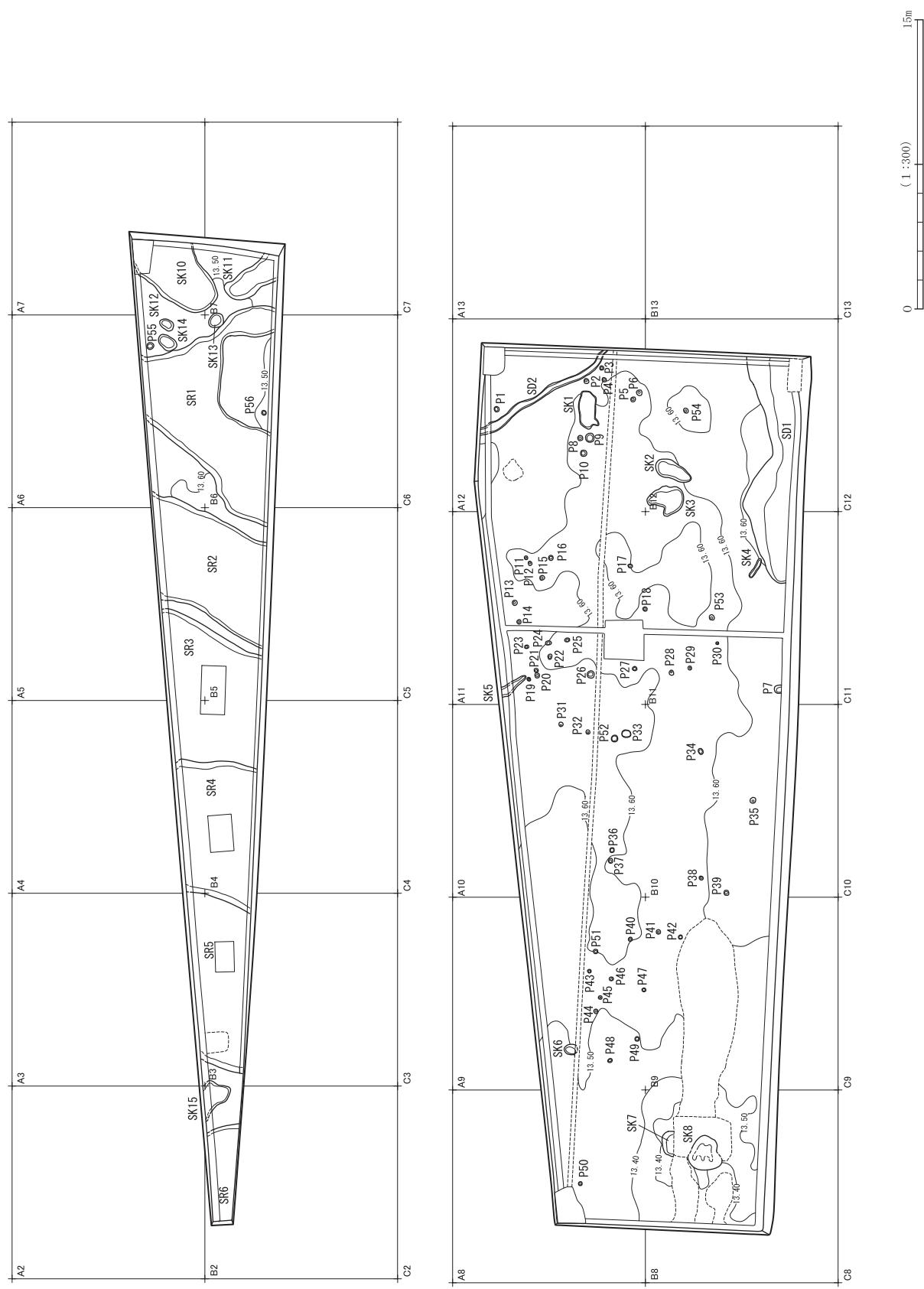
調査区配置図

図版 1

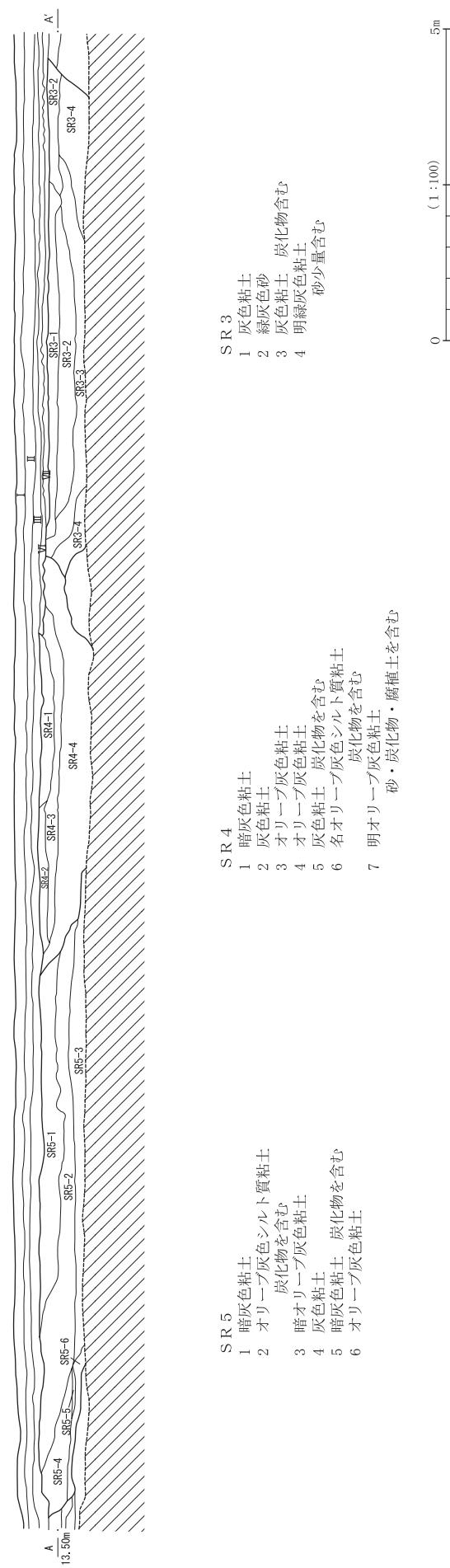
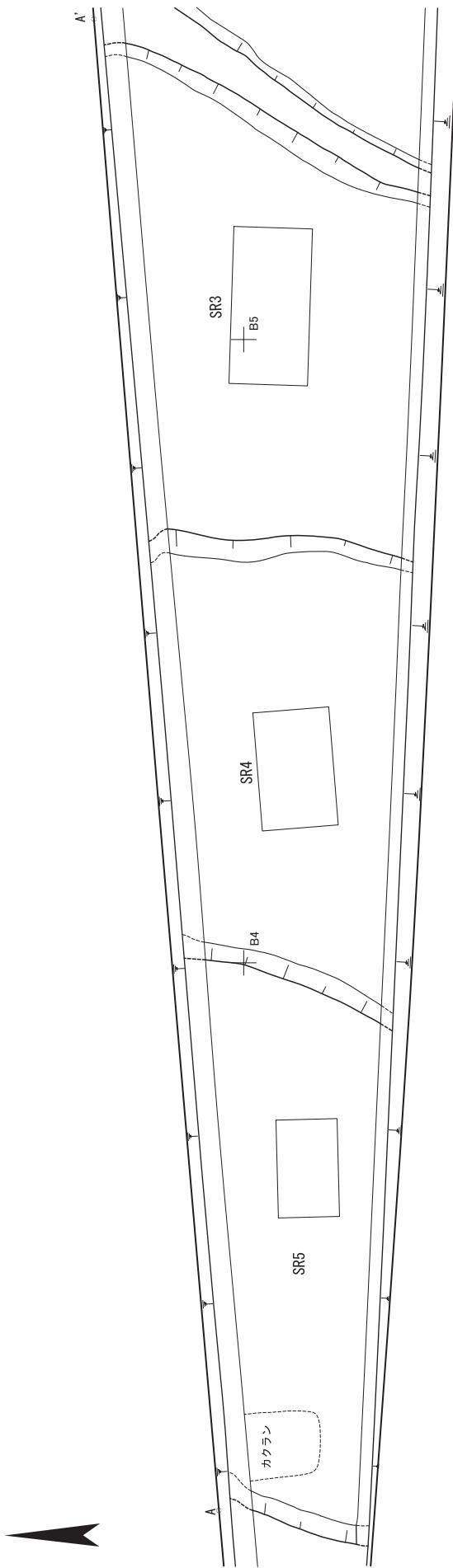


図版2

西区全体平面図



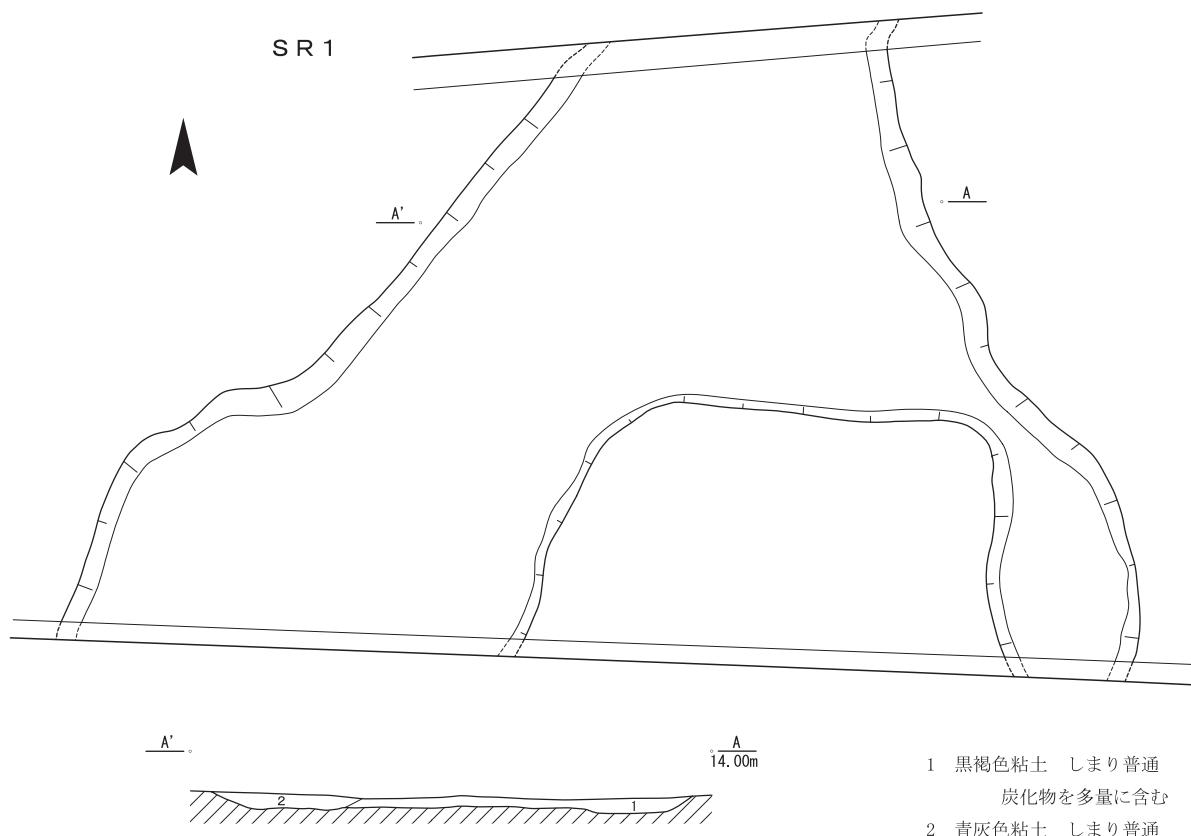
西区個別遺構図 1



図版 3

図版4

西区個別遺構図2

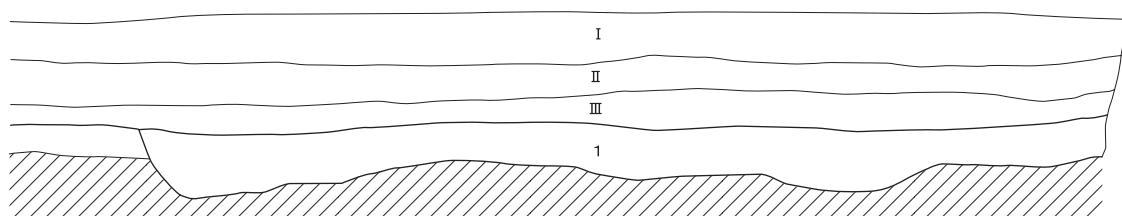
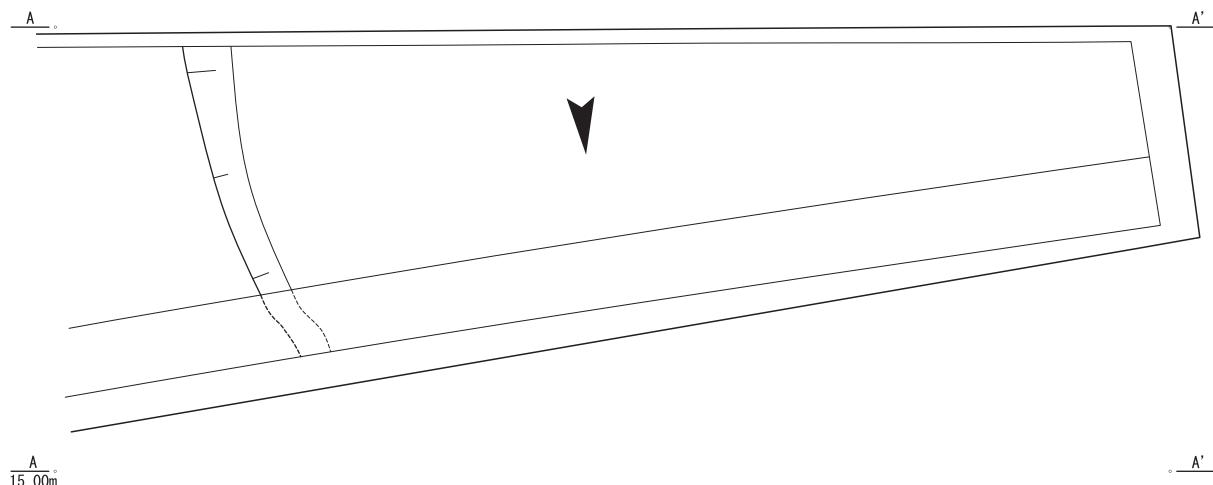


0 (1 : 80) 4m

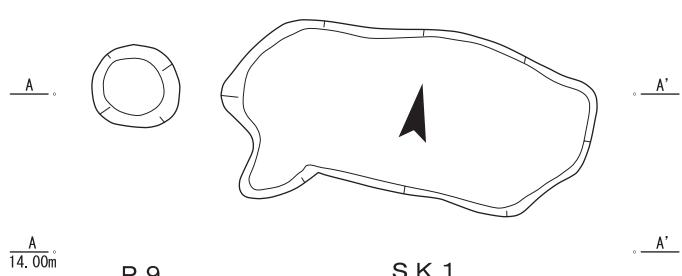
西区個別遺構図3

図版5

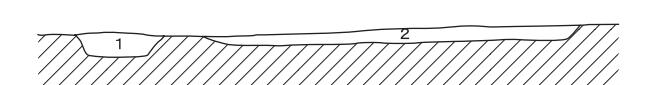
S R 6



P 9・SK 1

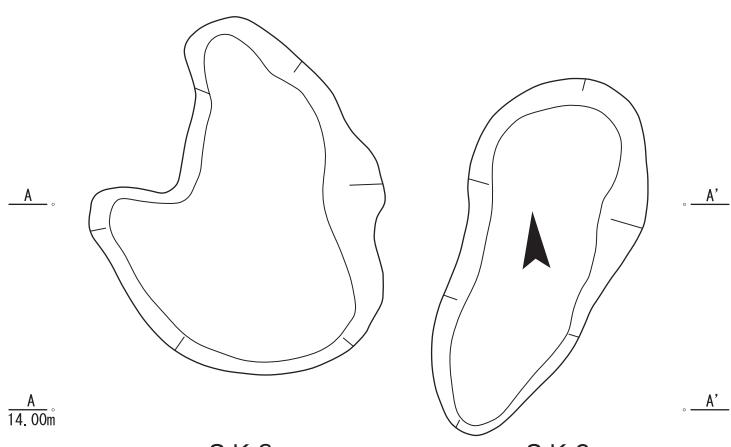


1 暗灰色粘土 しまり普通  
炭化物を少量含む



1 暗灰色粘土 しまり普通  
2 褐灰色粘土 しまり普通  
炭化物少量含む

SK 2・3



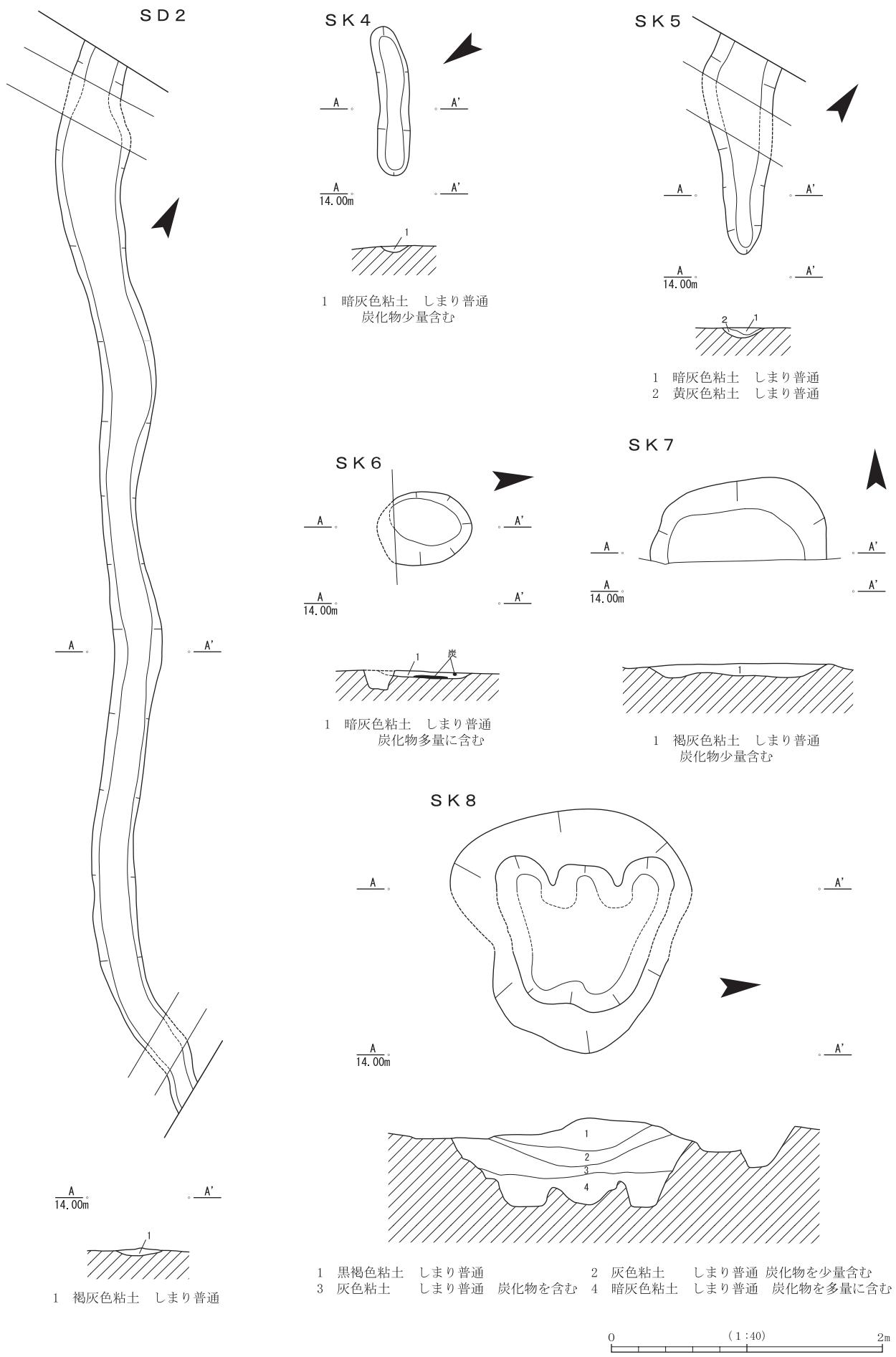
1 褐灰色粘土 しまり普通  
炭化物少量含む  
2 暗灰色粘土 しまり普通



0 (1 : 40) 2m

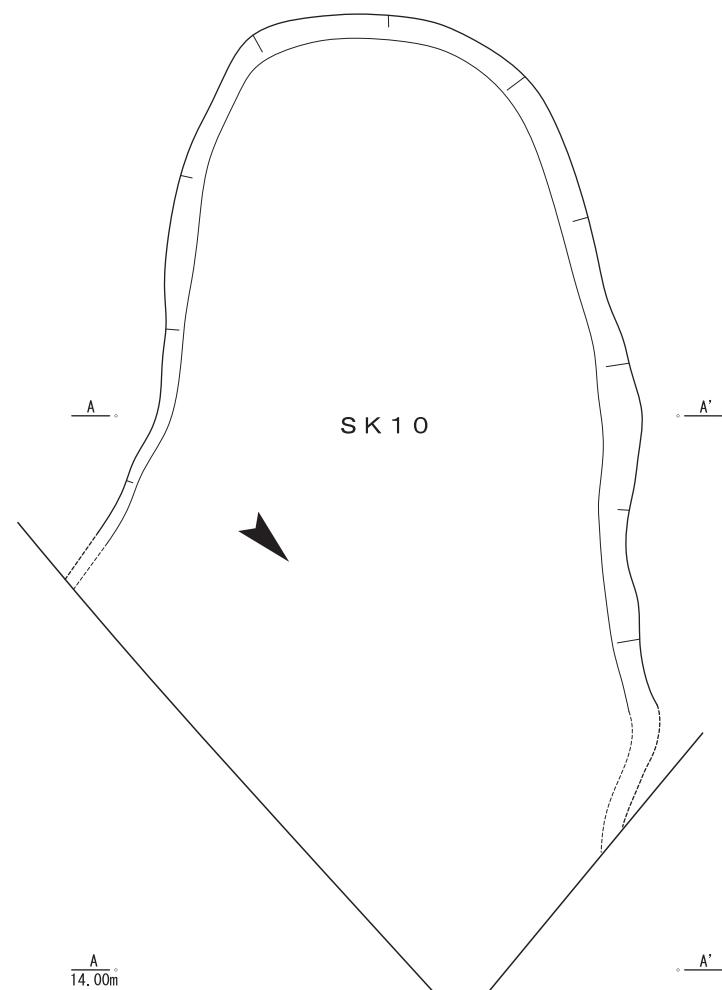
図版6

西区個別遺構図4

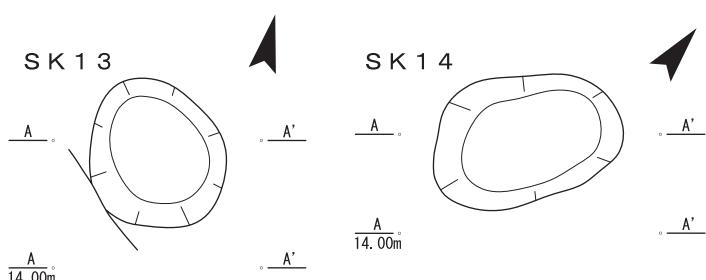


西区個別遺構図 5

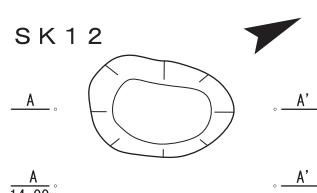
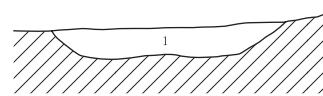
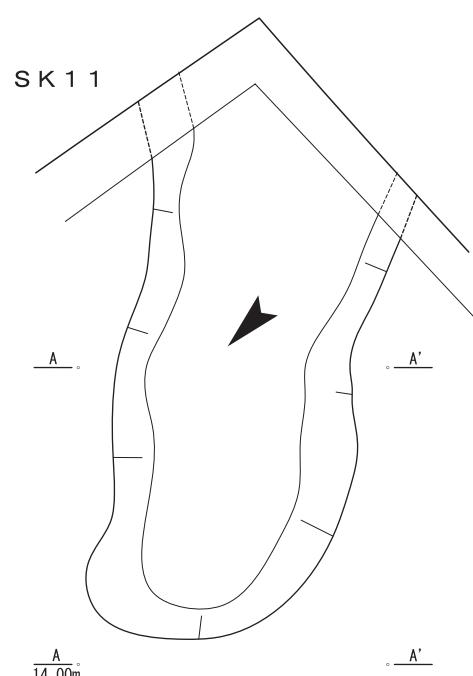
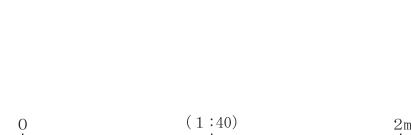
図版 7



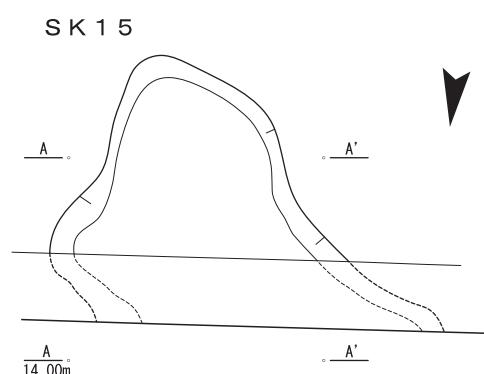
1 暗灰色粘土 しまり普通



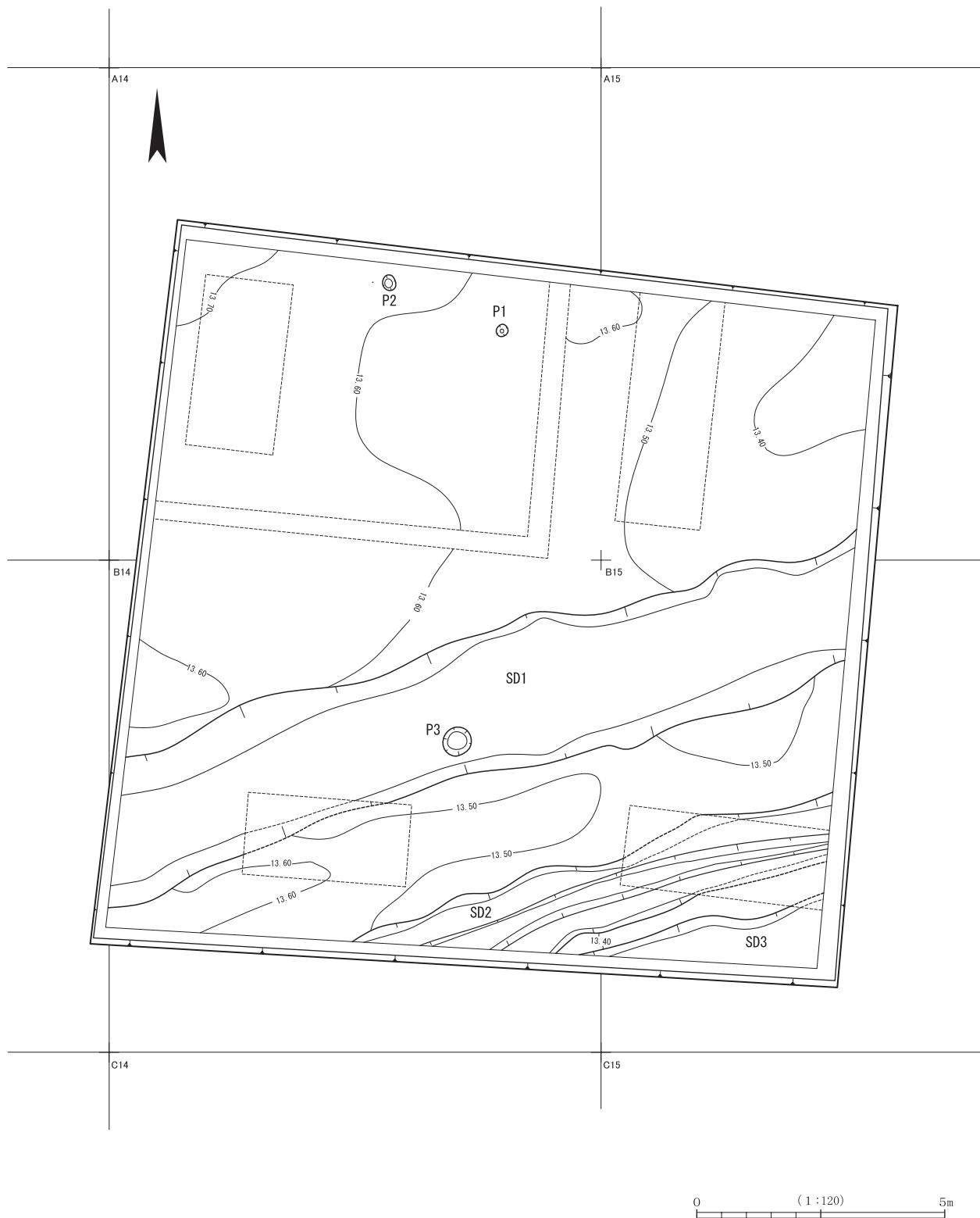
1 褐灰色粘土 しまり普通

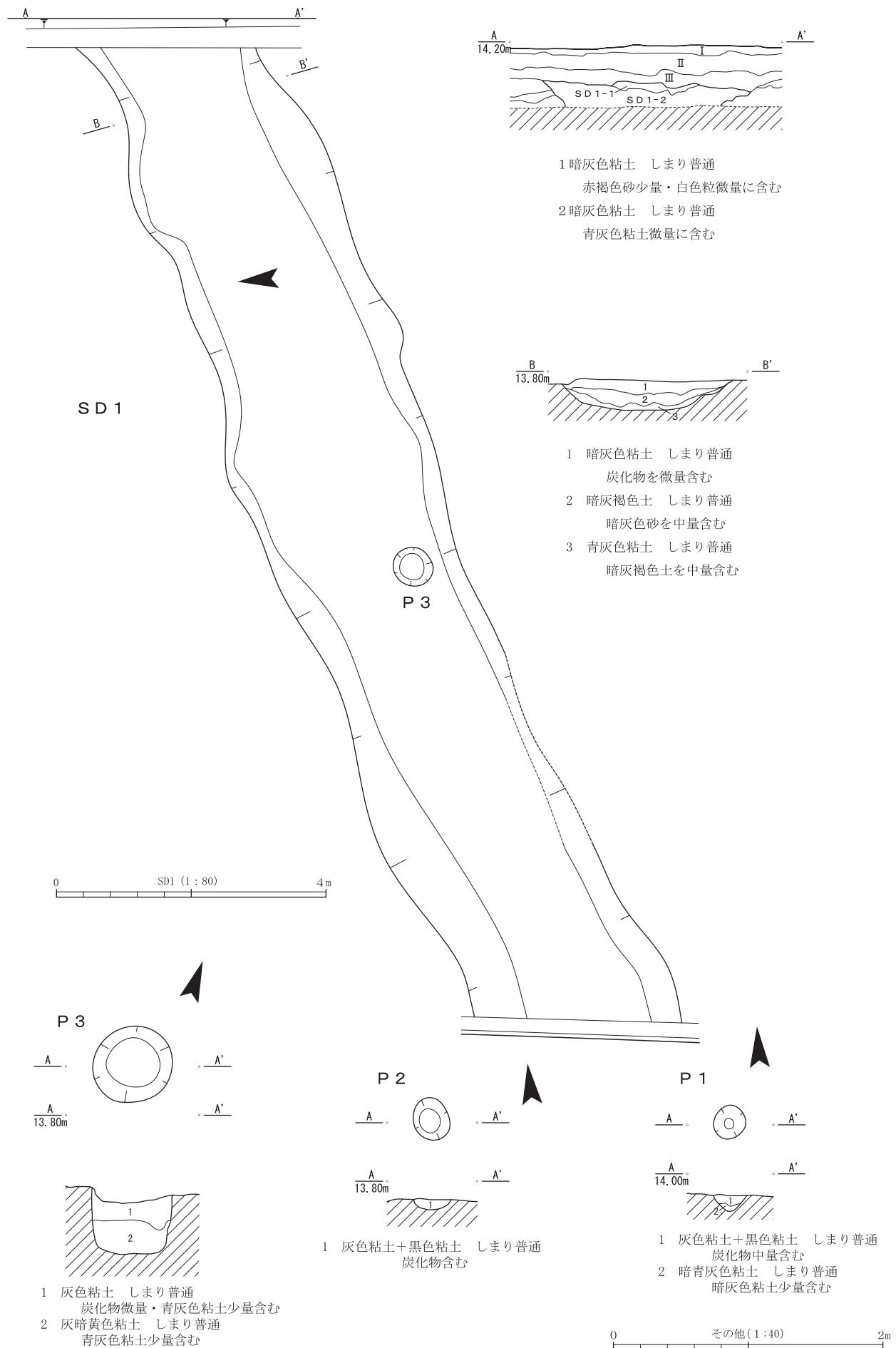


1 褐灰色粘土 しまり普通



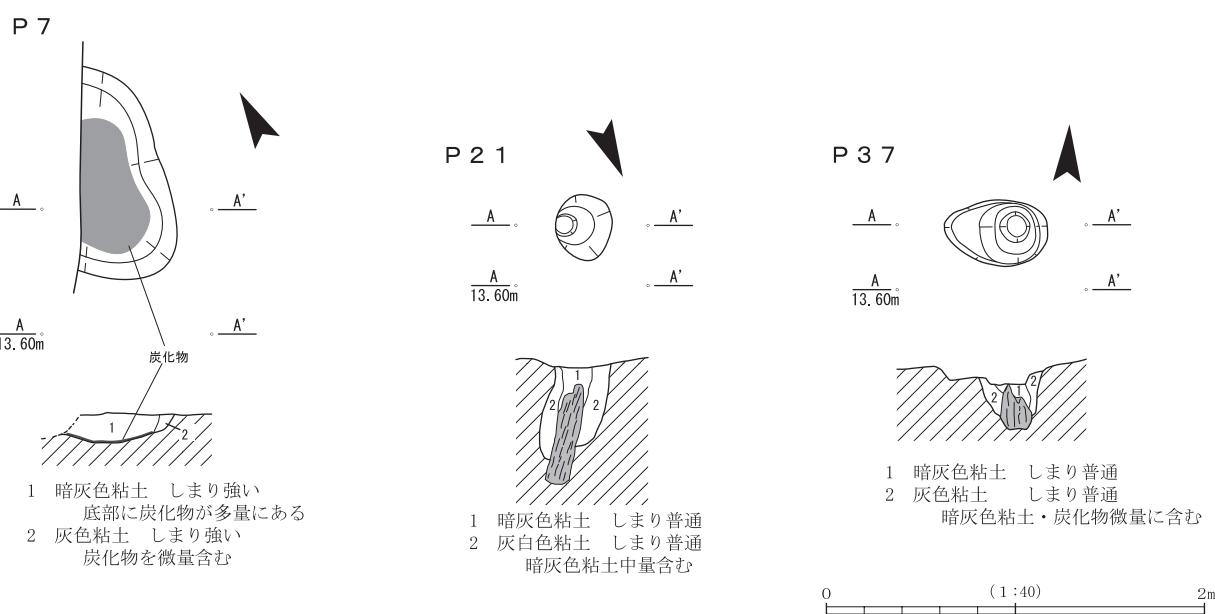
1 青灰色粘土 しまり普通  
炭化物を多量に含む

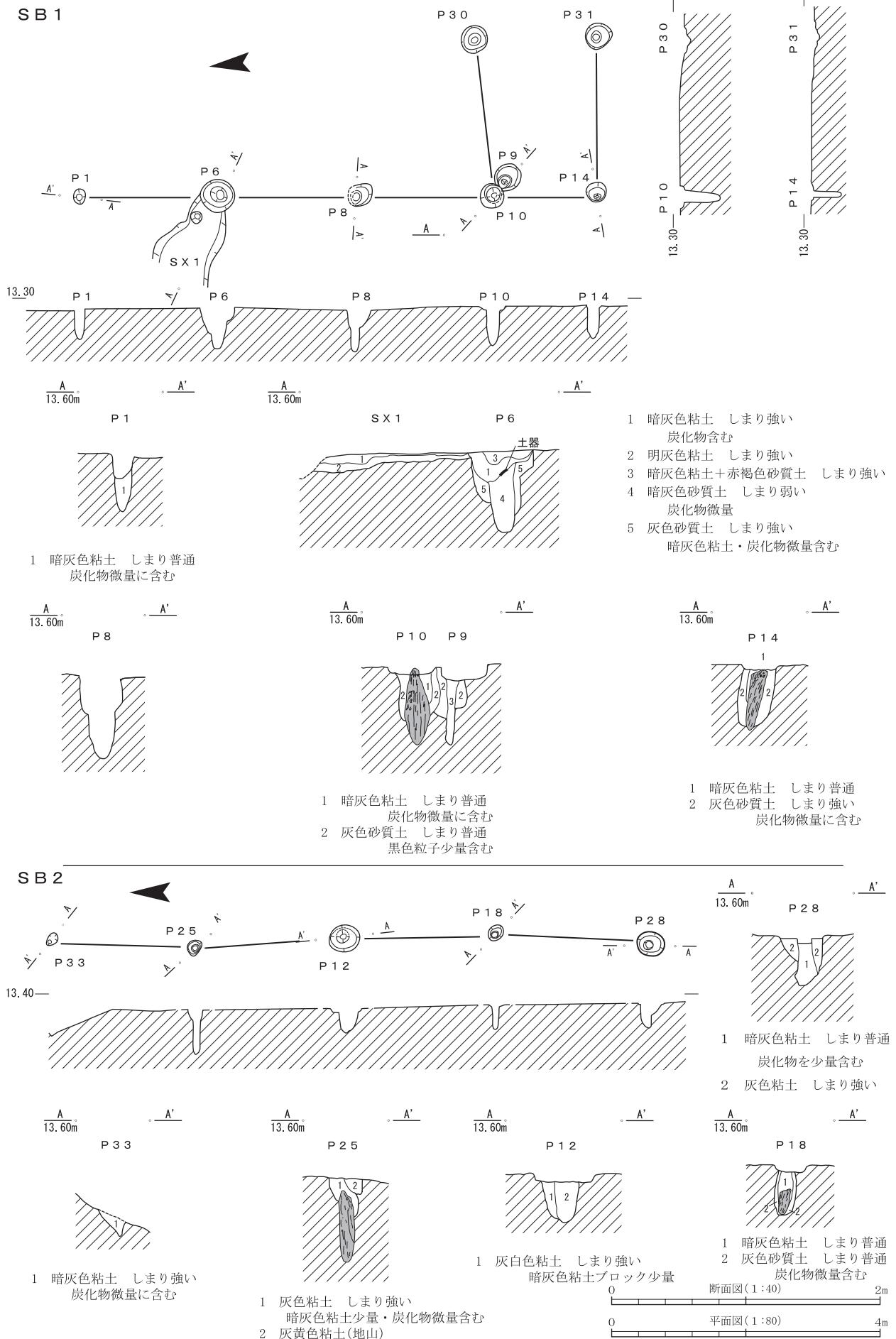




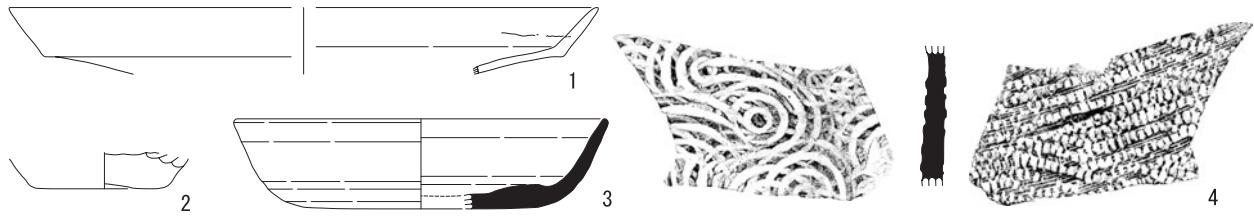
図版10

北区全体平面図

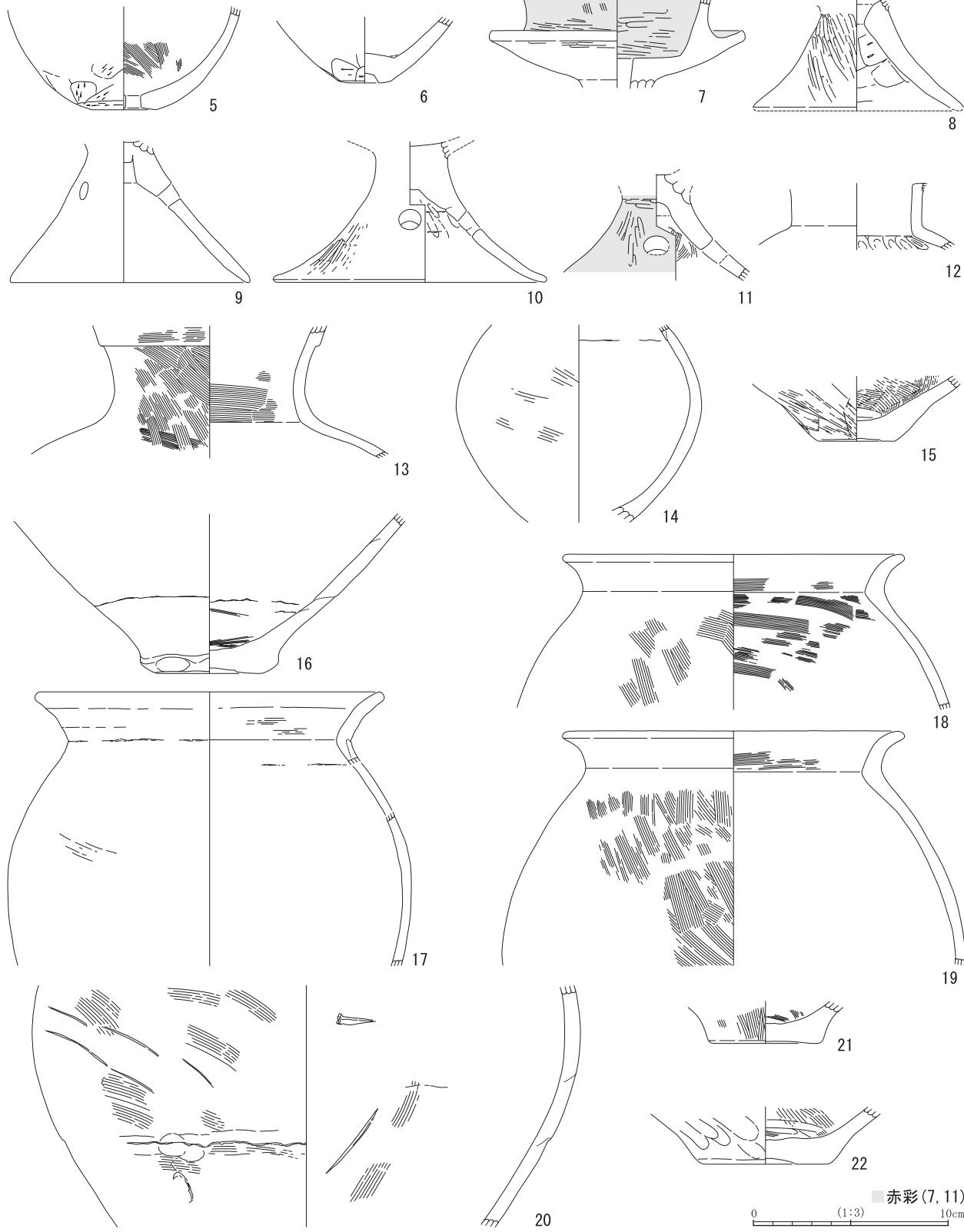




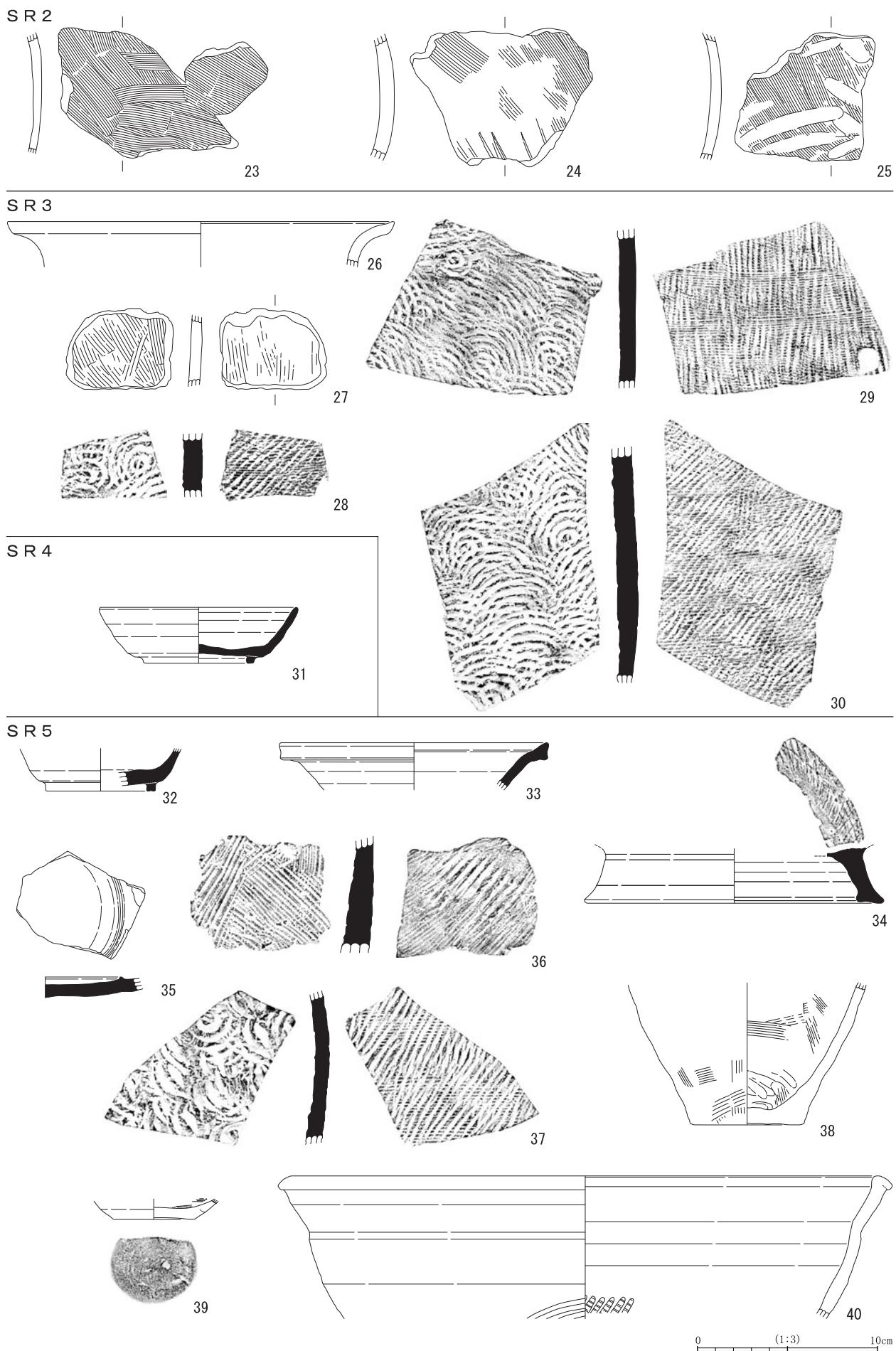
西区 SR 1



SR 2



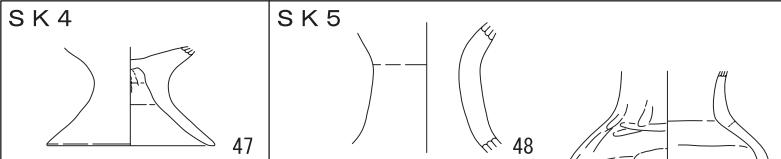
赤彩 (7, 11)  
0 (1:3) 10cm



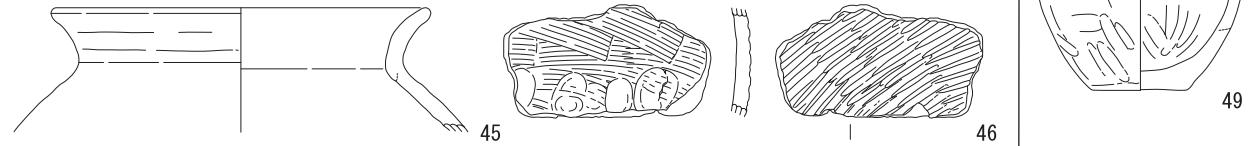
S R 6



S K 4



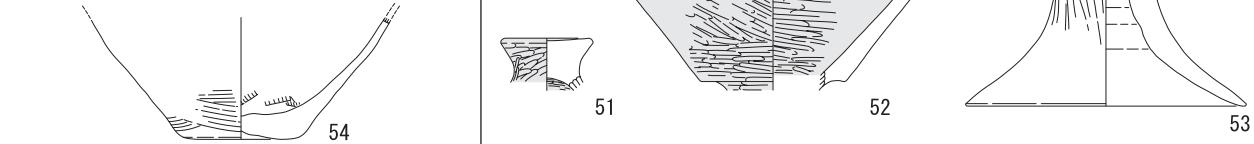
S K 3



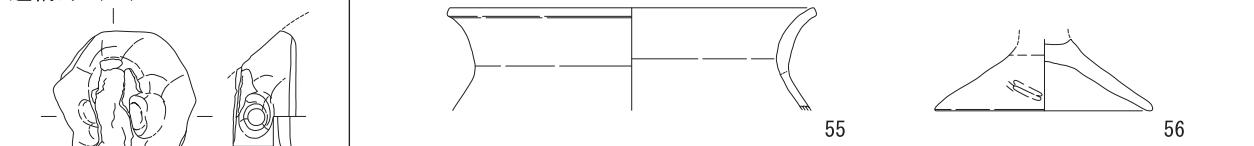
S K 6



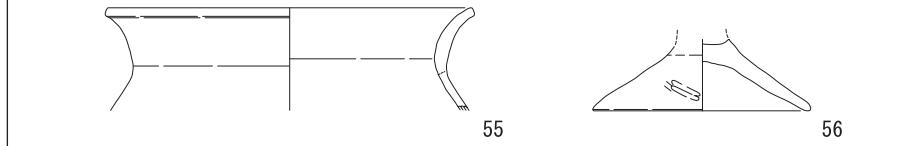
S K 14



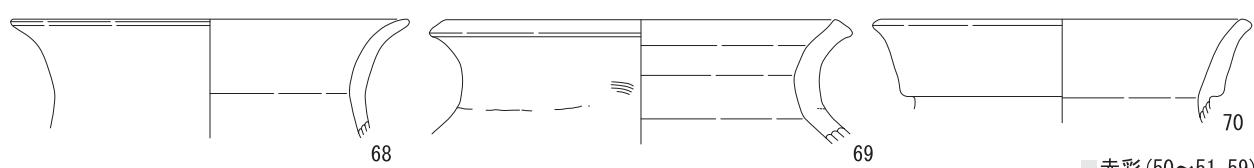
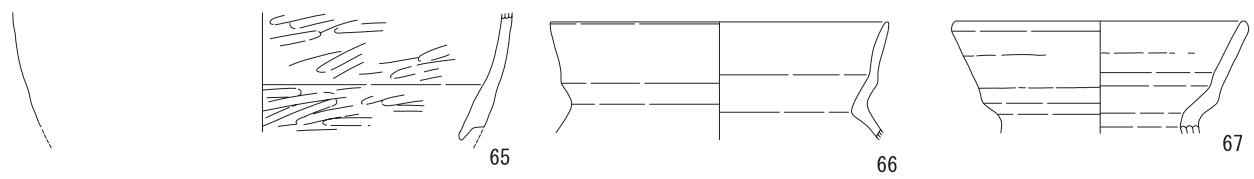
遺構外 (1)



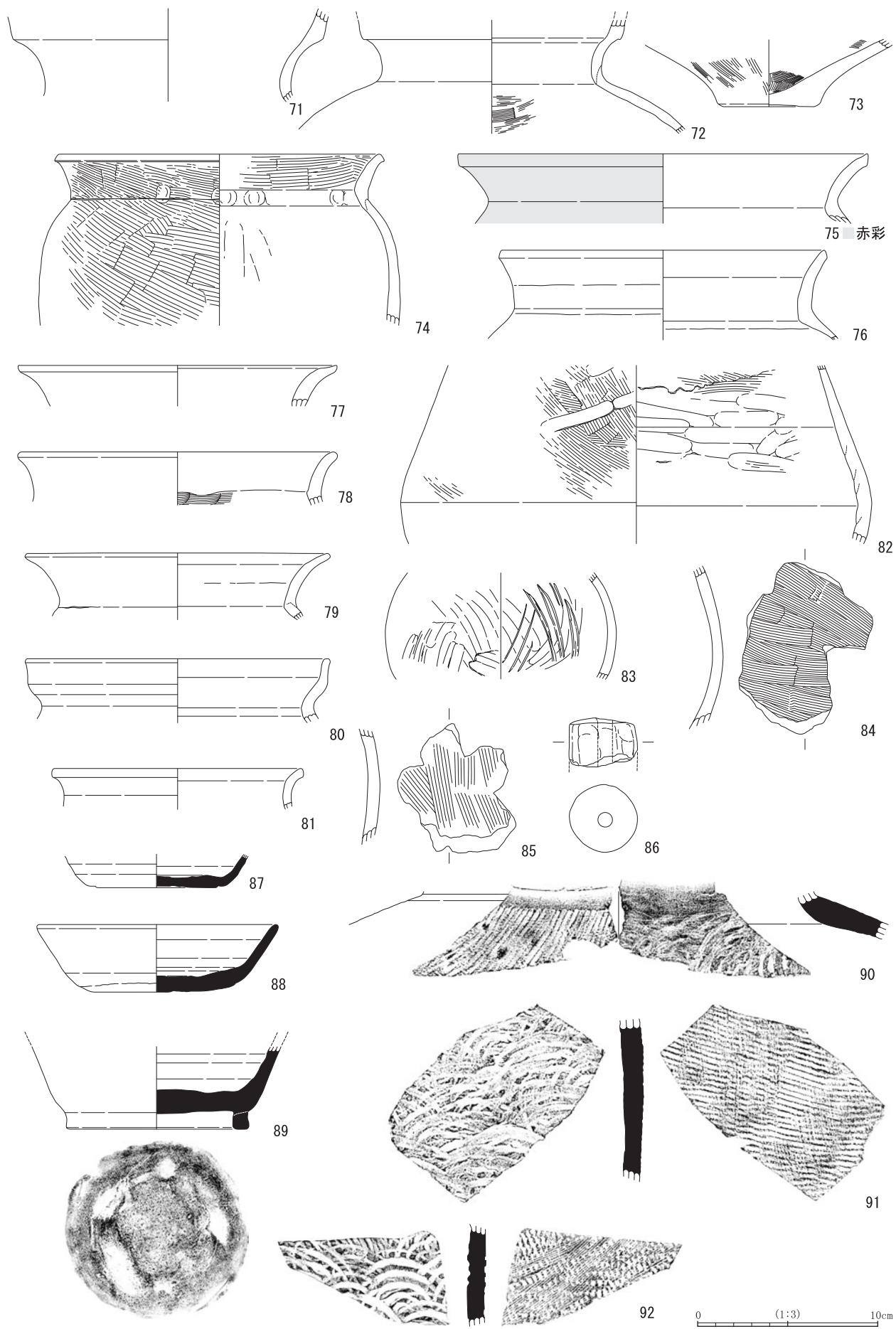
P 2 6



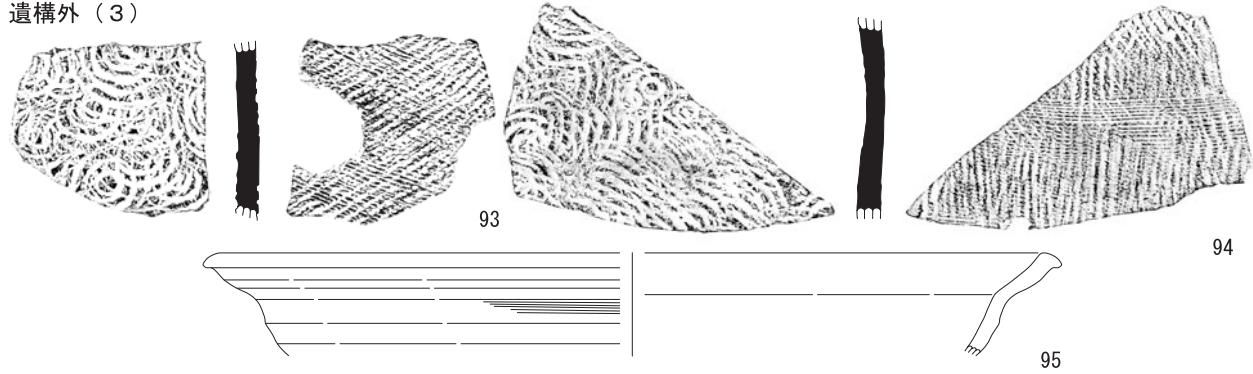
■ 黒色処理

■ 赤彩 (50~51, 59)  
(1:3)

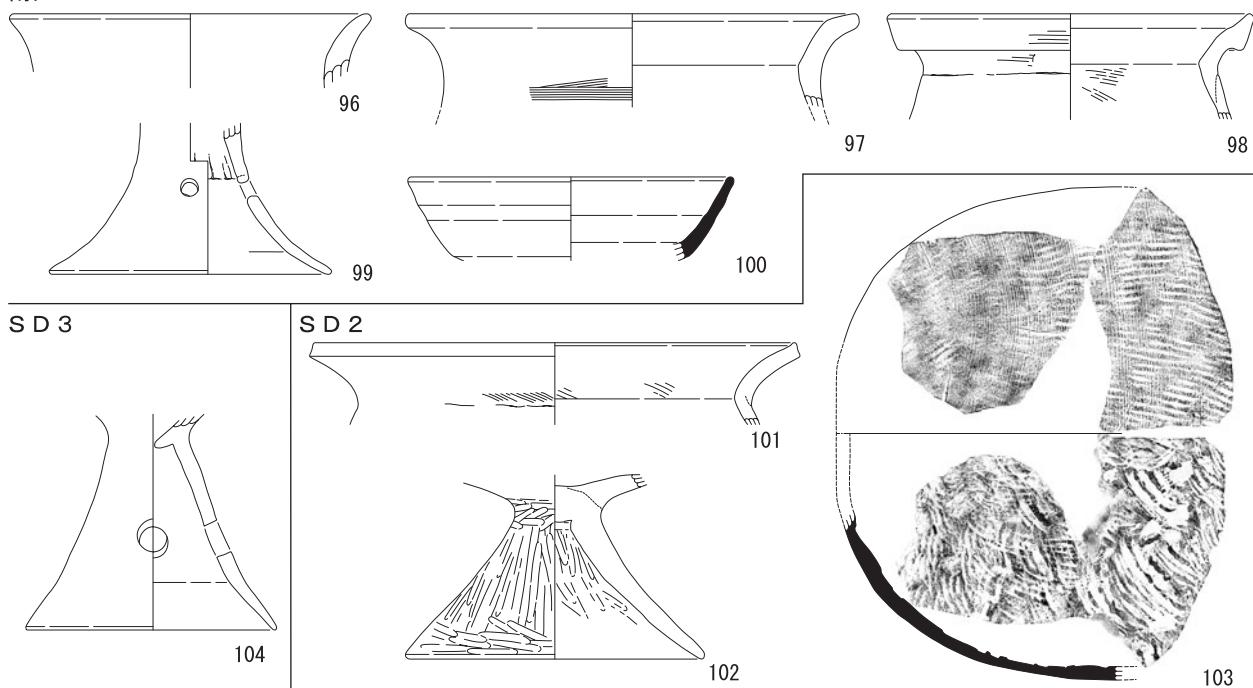
## 遺構外 (2)



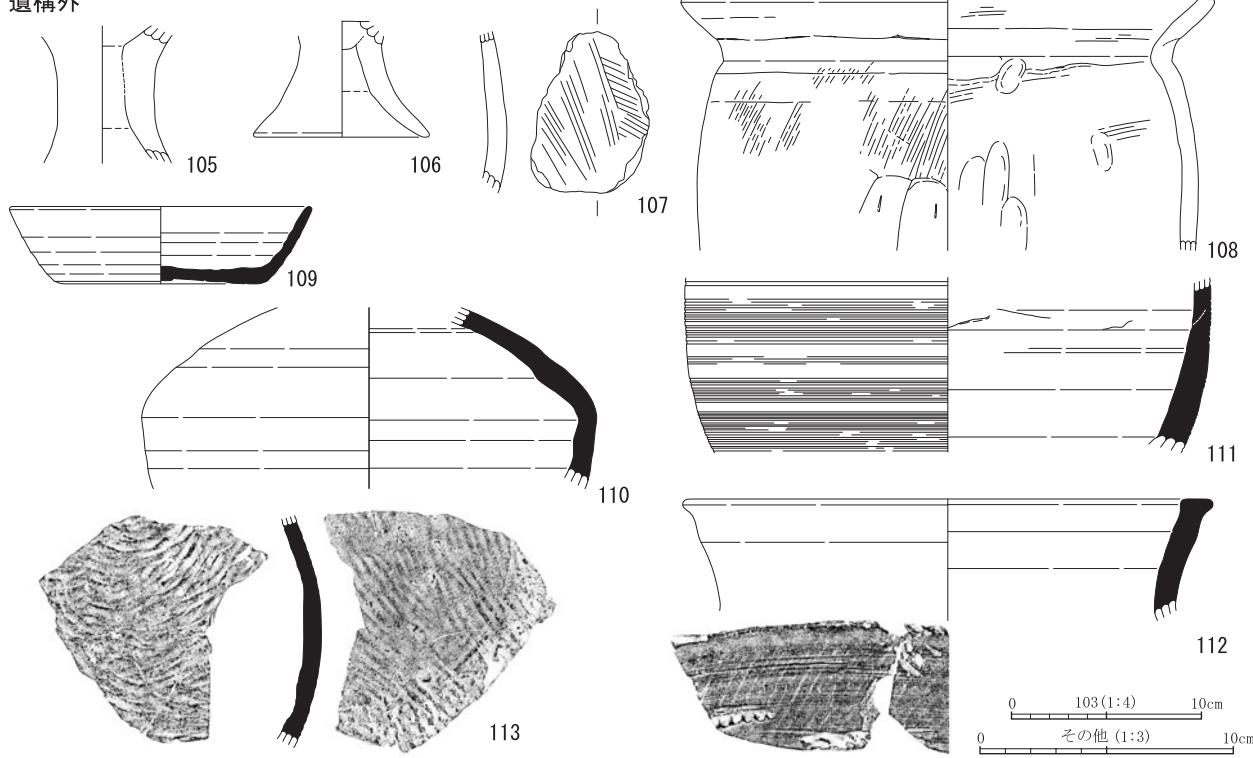
## 遺構外 (3)



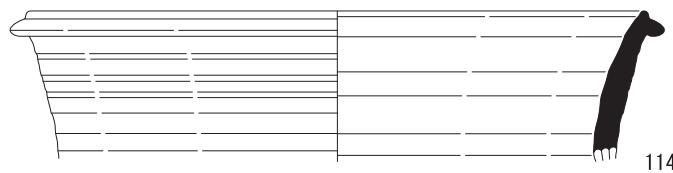
## 南区 SD 1



## 遺構外



北区 P 6



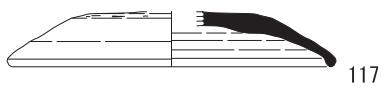
P 3 6



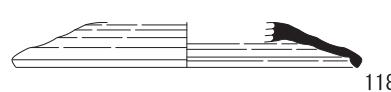
墨書「泉田西庄」

114

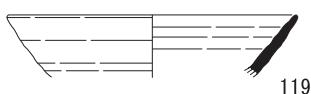
遺構外



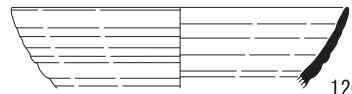
117



118



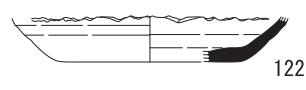
119



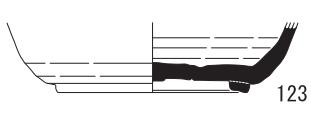
120



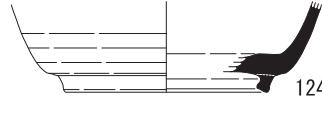
121



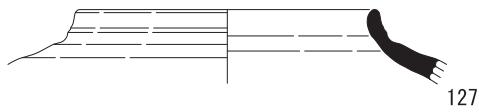
122



123



124

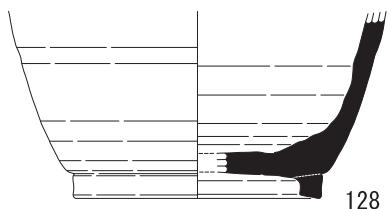


125

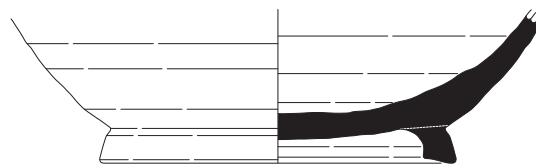
■タール



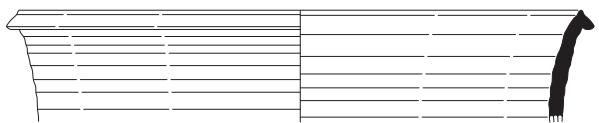
126 転用硯



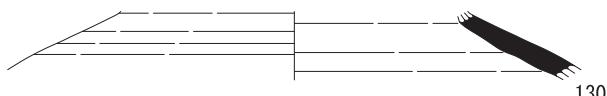
127



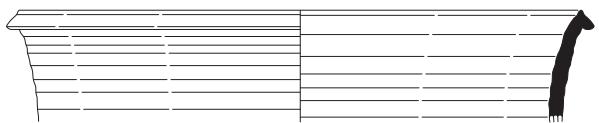
128



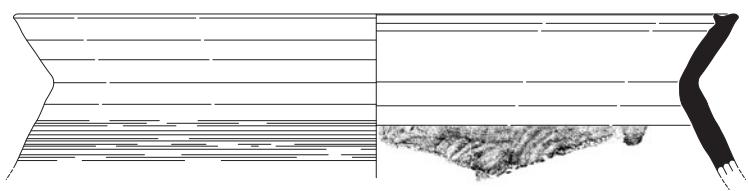
129



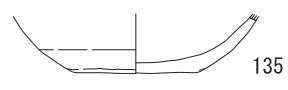
130



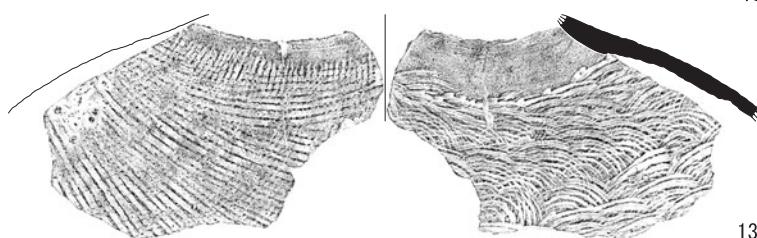
131



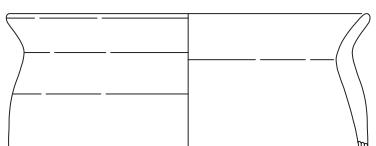
132



133



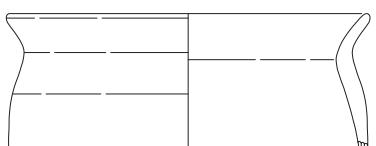
134



135



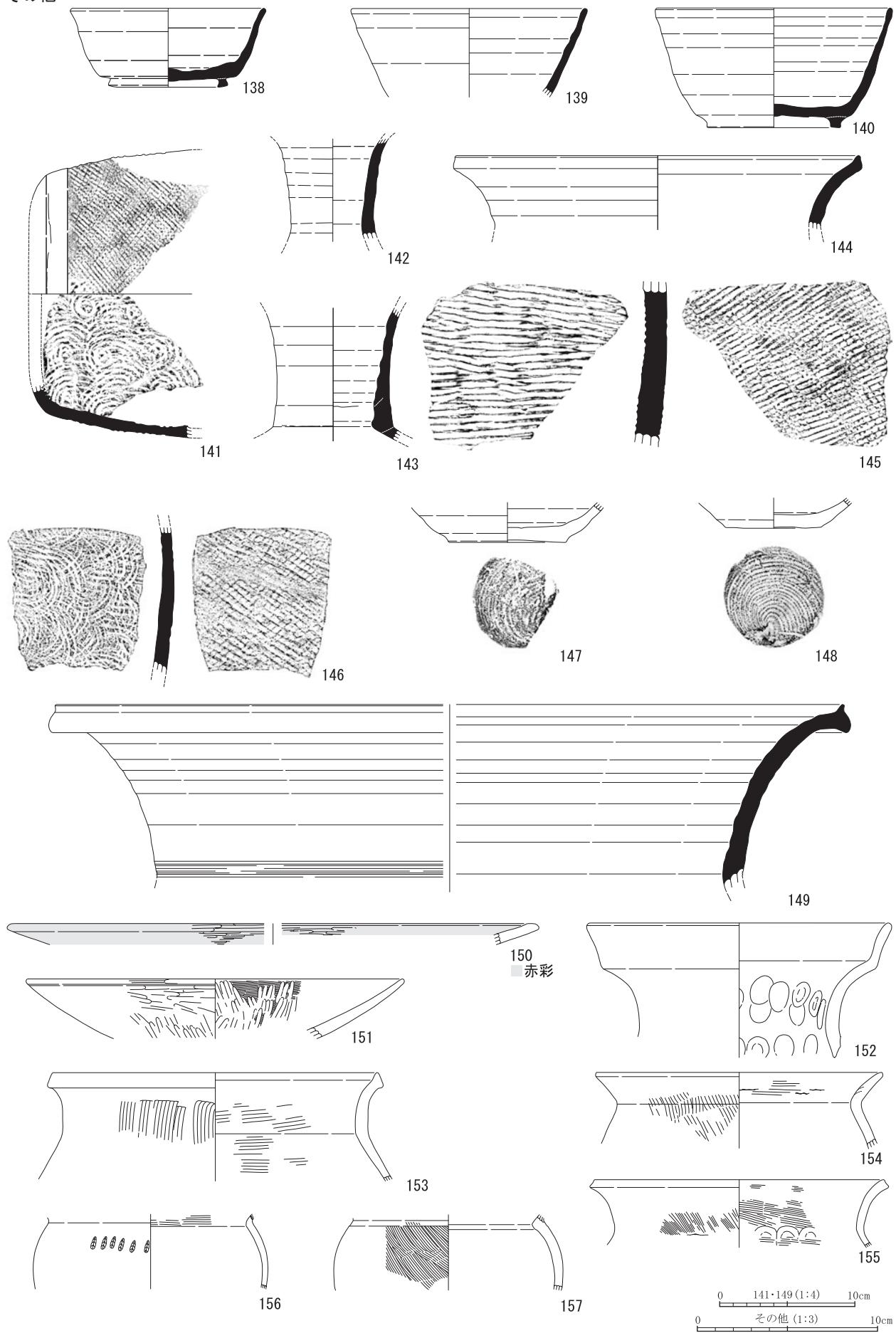
136

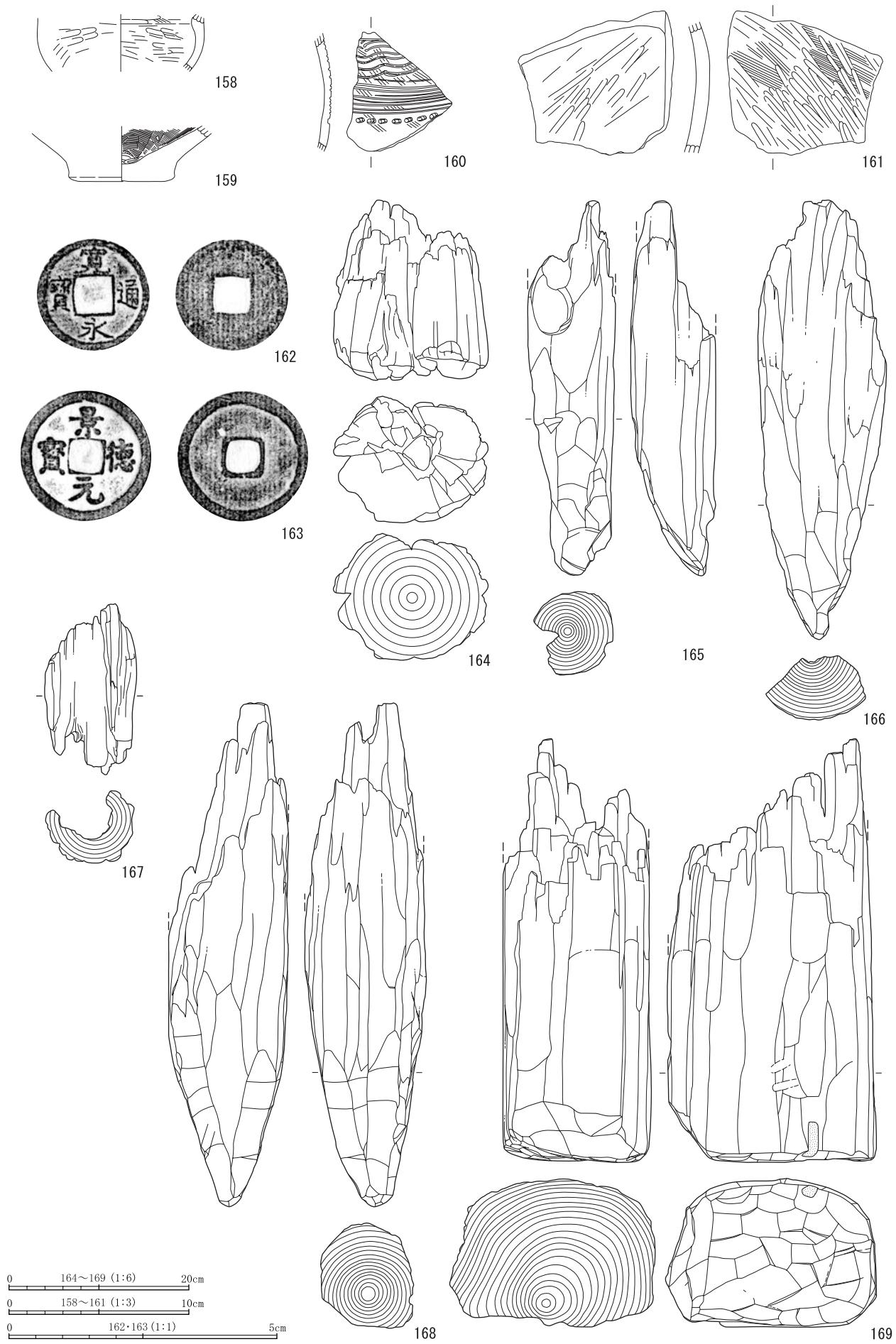


137

0 131～134 (1:4) 10cm  
0 その他(1:3) 10cm

その他







西区全景 1



西区全景 2

調査写真 2



SR 1 完掘（東から）



SR 2 堀り下げ（東から）



SR 4 堀り下げ（東から）



SR 5 堀り下げ（東から）



SR 6 完掘（北から）



SD 2 完掘（南から）



SK 5 遺物出土状況（南から）

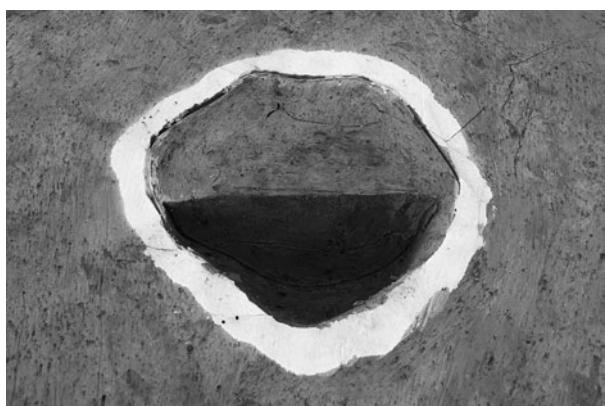


SK 8 断面（東から）

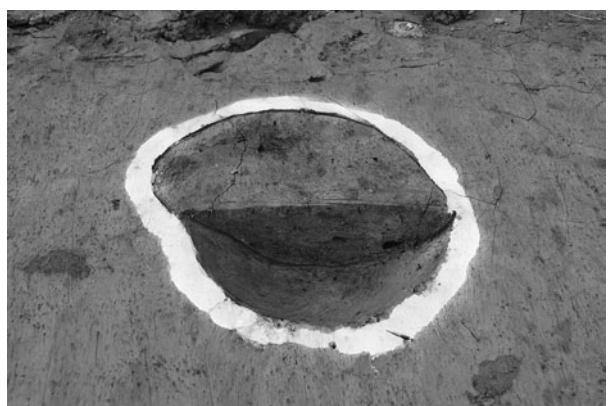
図版21



南区全景



P 1 断面（南から）



P 2 断面（南から）



P 3 断面（南から）



SD 1 断面（西から）



北区完掘（北から）



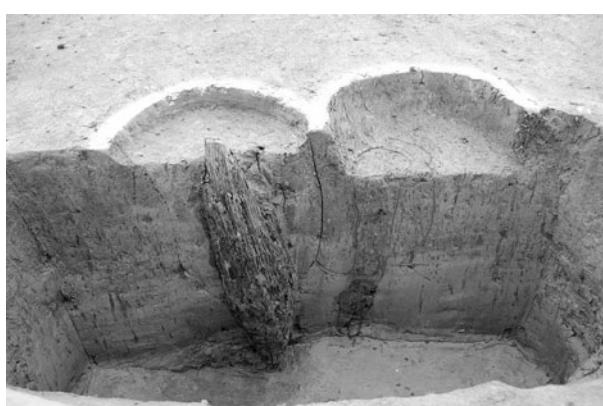
P 1 完掘（東から）



P 6 断面（南から）



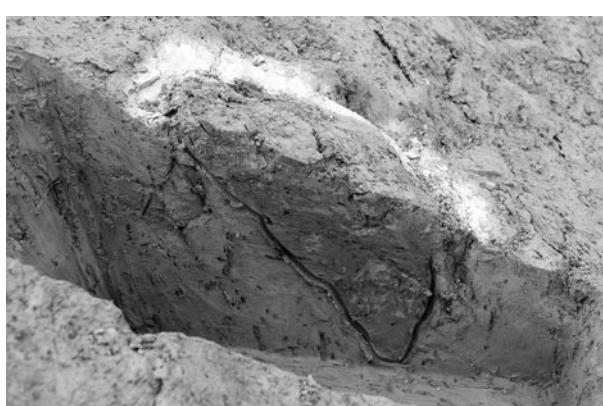
P 8 完掘（北から）



P 9・P 10断面(南から)



P 14断面（南から）



P 33断面（北から）



P 25断面（南から）



P 12完掘（東から）



P 18断面（南から）



P 21断面（北から）



P 37断面（南から）



P 7断面（南から）



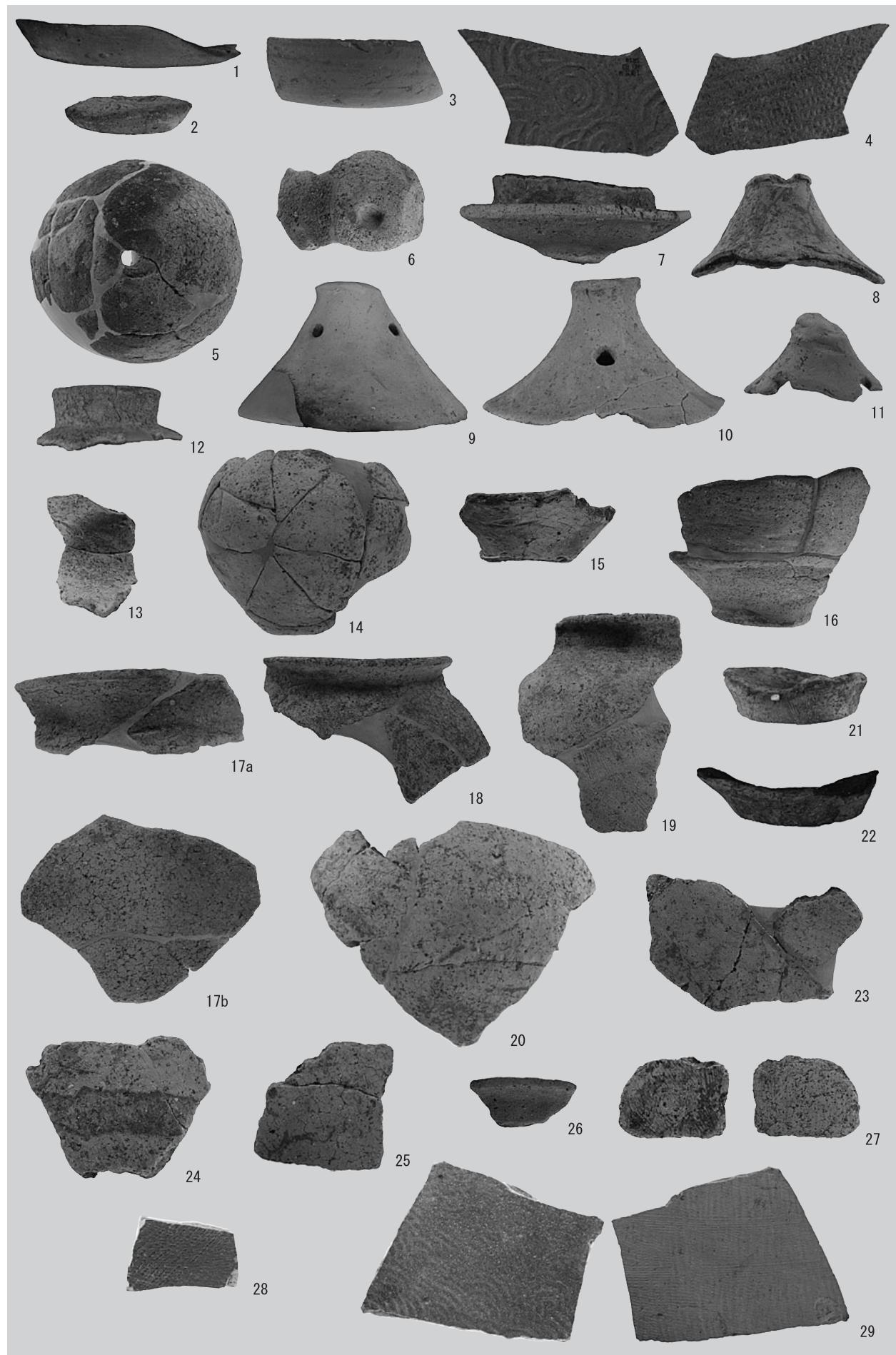
P 7炭化物検出（南から）

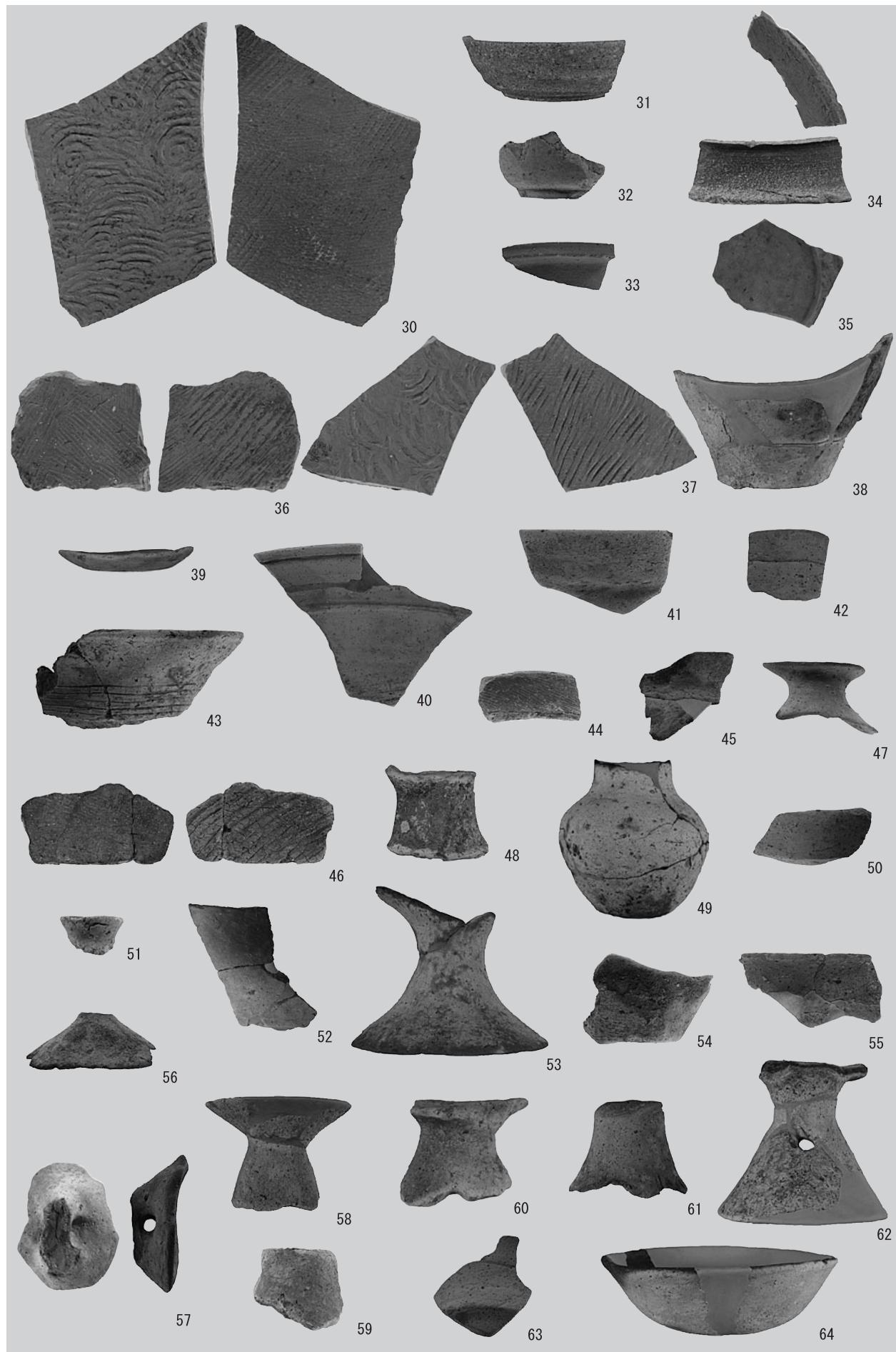


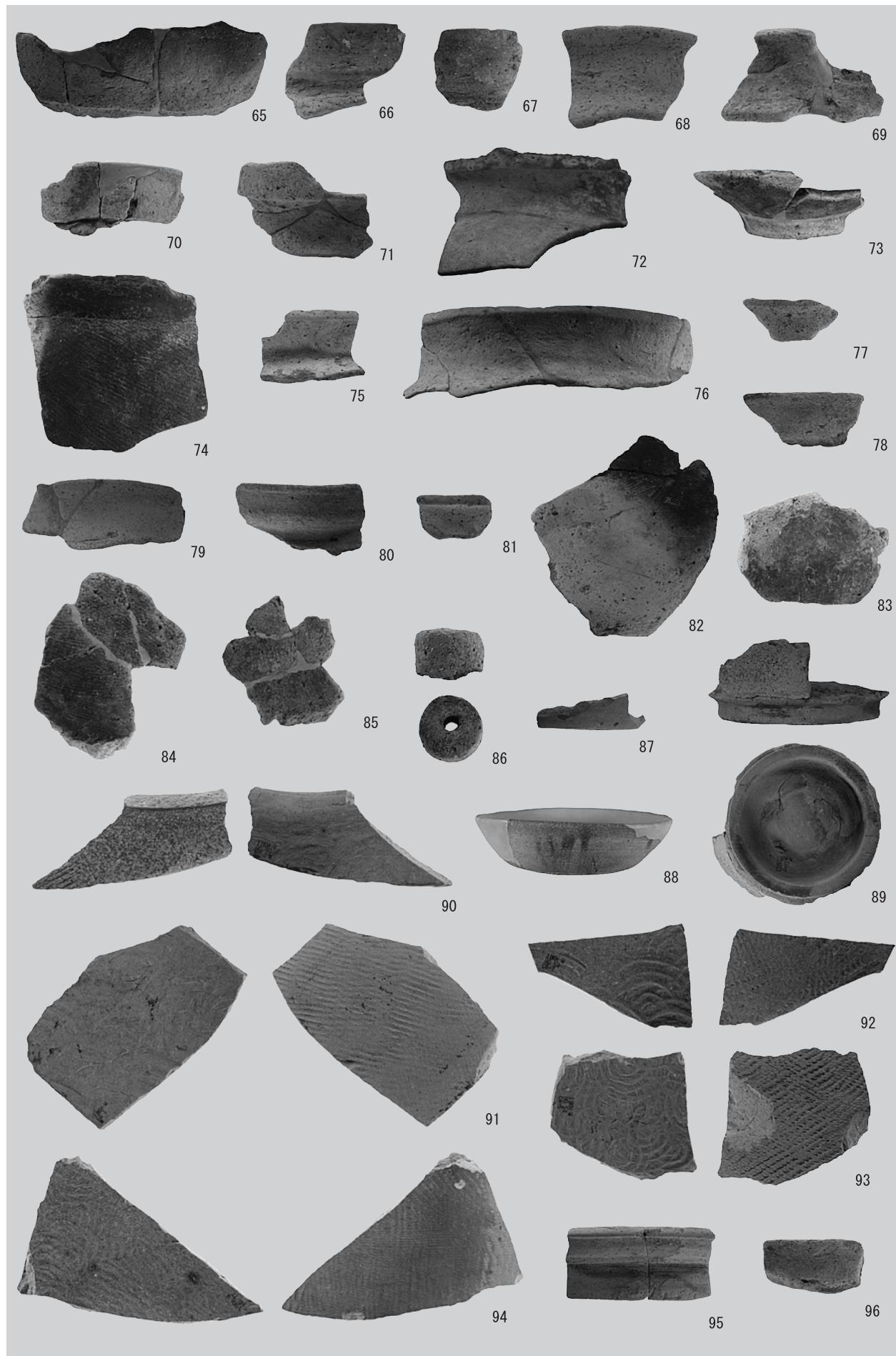
作業風景 1

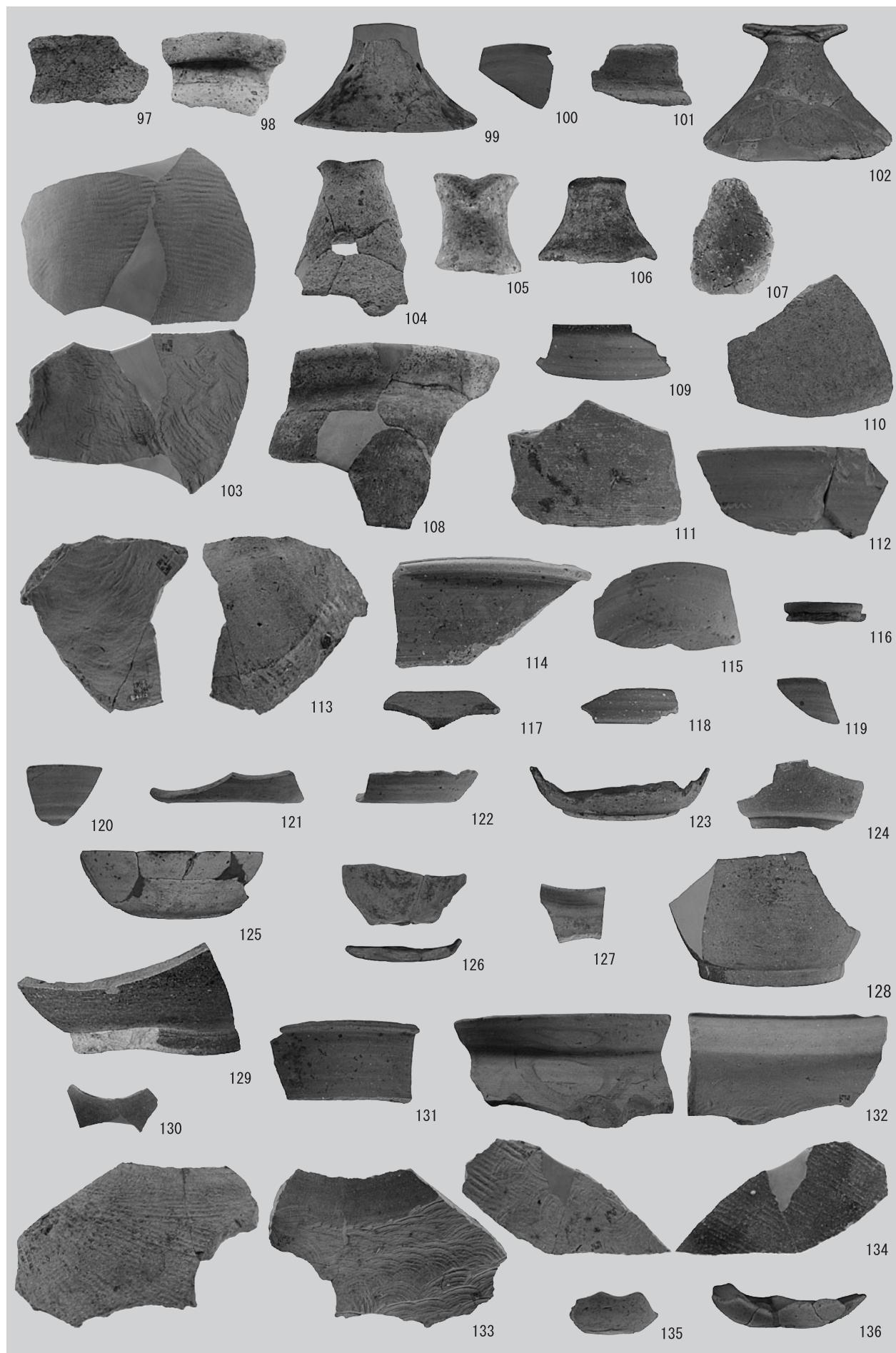


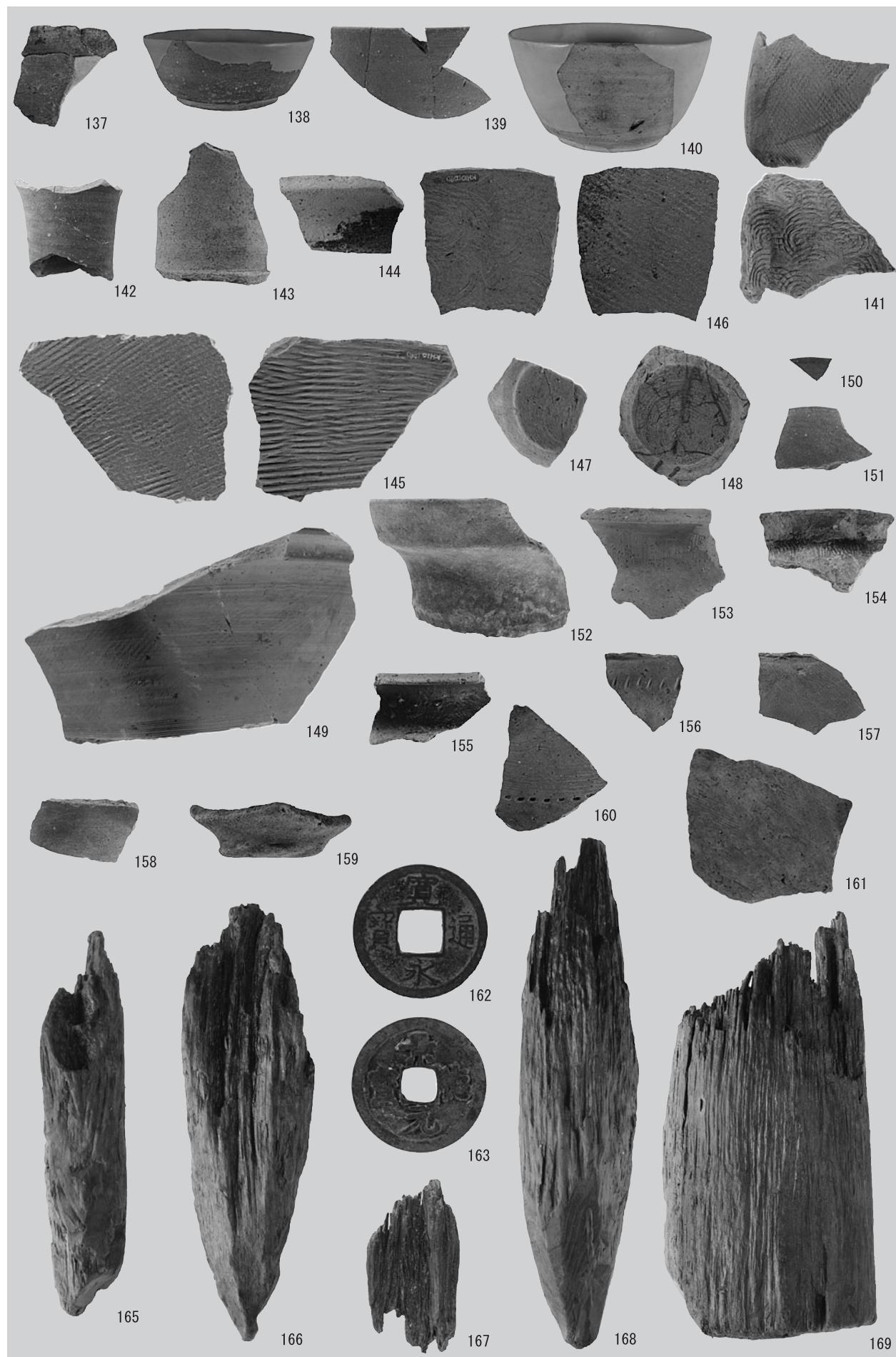
作業風景 2











## 報告書抄録

ふりがな	かわひがしいせき							
書名	川東遺跡							
副書名	二級河川郷本川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山賀和也							
編集機関	長岡市教育委員会							
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL0258-32-0546							
発行年月日	2012年3月12日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
かわひがしいせき 川東遺跡	にいがたけん 新潟県 長岡市 しまさきあざかわひがし 島崎字川東	15021	1304	37° 34' 51"	138° 46' 36"	20100615 ～ 20110131	1217 m <sup>2</sup>	河川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時期		主な遺構		主な遺物		特記事項
かわひがしいせき 川東遺跡	集落跡	古墳時代前期		旧流路・溝・ 土坑・ピット		土師器・土錐		「泉田西庄」と書かれた墨書土器が出土
		平安時代 (9世紀後半)		掘立柱建物跡 ・土坑・ピット		須恵器・土師器・柱根		

### 川東遺跡

二級河川郷本川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

平成24(2012)年3月12日 印刷

平成24(2012)年3月12日 発行

発 行 新潟県長岡市教育委員会

印 刷 株式会社サンワプロセス

